人と自然がともに呼吸しあえる総合的な環境づくり

Nelsis ネルシス

自然浴環境デザイン

Vol. 7

特集

21世紀のランドスケープ・エコロジー

沸騰する北京

胡同（フートン）の水脈

❖

紫禁城を中心とする北京の南北軸のライン、そこでは壮大な建築プロジェクトが繰り広げられ、
巨大なパースペクティブのなかに世界都市 Beijing（北京）が蘇生する。
遠く古来からの故宮や万里の長城と共に、中国の「建築への意思」の強さに驚愕する。
一方、胡同の迷路に入ると等身大のスケールのなかに人々の暮らしが見える。
伝統的な四合院の街並みをリニューアルし、アンティークなバーやカフェ、モダンなギャラリーが新興する。
それは開発の枠組の隙間に漏れる、もう一つの都市の素顔でもある。
使い方を決められた器を与えられても面白くない。使いこなしがその人の家になるという「無軌道な欲望」の集積。
忌まわしき光景といわれた胡同の迷宮へ人々は回帰する。体制の変化の過程でそのような光景とよく出くわす。
欧州ではベルリンの旧東地区と同様の現象である。それはアンチでもアナクロでもなく、自由な遊び心というものだ。
それが都市の身体に濃艶な水脈をはぐくんでゆく。胡同の一角にある、西太后の生家ともいわれる桂公府。
その夕刻の典雅な芳香のなかで、新古の交差点をたおやかに遊泳する、北京の感性と構築力にアジアの中心の疾風を感じる。

文・写真……シヲバラ タク

人と自然がともに呼吸しあえる総合的な環境づくり

Nelsis ネルシス

自然浴環境デザイン

Nature（自然力）＋ Element（要素）＋ Oasis（やすらぎ空間）

［表紙写真］ライトアップされた夜の天安門前（北京）
撮影：シヲバラ タク

CONTENTS

Vol.7
2006-2007

02 ［特集］沸騰する北京 21世紀のランドスケープ・エコロジー

04 変貌する北京・中国……❖ 大西 隆
06 いにしえの生活を今に伝える胡同の街並み
12 中国現代アートの発信地「北京798芸術区」
16 コリアンパワーが炸裂する新しいアートスポット「酒工場芸術区」
18 北京の未来を担う CBD（中央ビジネス区）
22 ［インタビュー］艾 未未――「北京は魅力のない都市だ」
25 激動の中国に立ち会う……❖ 方 振寧
26 北京の過去、現在、未来が一望できる「北京市計画展覧館」
28 21世紀はアジアの世紀――北京市再開発調査団報告
30 北京点描

32 がんばる自治体のまちづくり奮闘記 ❹

東京都青梅市／ノスタルジーで人々に安らぎを与える町
先人から受け継いだ財産で癒しのまちづくり

40 ［シリーズ］自然浴環境――6

ソウルと都心によみがえった清流「清渓川」……❖ 一ノ瀬俊明

44 Product Message ［プロダクト メッセージ］

●中島川公園（長崎県長崎市） ●小浜漁港（福井県小浜市） ●横浜市阿久和川（神奈川県横浜市） ●木曽川笠松護岸（岐阜県羽島郡） ●横浜市和泉川（神奈川県横浜市） ●千葉県済生会習志野病院（千葉県習志野市） ●TDK歴史資料館（秋田県にかほ市） ●藤沢ゴルフ場（神奈川県藤沢市） ●コスモポート種子島（鹿児島県熊毛郡） ●国道2号今津PA休憩施設（広島県福山市） ●試験場前駅北口広場・南口広場（福岡県久留米市） ●大阪城公園玉造口（大阪府大阪市） ●かのやばら園（鹿児島県鹿屋市） ●南千住公園（東京都荒川区） ●龍華町東公園（大阪府八尾市）

54 ［シリーズ］私の景観論――1

「情報デザイン」と「景観」……❖ 小林治人

57 世界のストリートファニチャー❻

中国：北京　伝統建築を模したデザイントイレ

■発行日／2006年10月1日 ■発行／東洋エクステリア株式会社 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-4-12
■企画・制作／フォンテルノ 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿4-5-25-806 ■印刷／凸版印刷株式会社

特集

沸騰する北京

2008年の
オリンピック開催を控え、
北京市は国際近代都市へと
ダイナミックに変貌しようとしている。
天安門広場と故宮の間の長安街通りには大量の車が往来し、
帯状になって自転車が行き来するかつての風景はどこにも見られない。
故宮を中心に南北に延びる軸線上の北には、オリンピック施設群が
急ピッチで建設され、東へ5kmも行けば、
超高層ビルが林立するCBD(中央ビジネス区)が広がっている。
歴史的景観区である故宮周辺では、人民大会堂の西側にあった胡同(フートン)地区が
一掃された跡地に夕日で黄金色に輝くUFOのような国家大劇院が建設され、
新旧混在する風景へと変わっている。
日本でも2006年に上映された映画『胡同のひまわり』では、中庭を囲んだ四合院が
密集し、胡同と呼ばれる細い路地のある地域を舞台に、
壊されていくまちと、それにシンクロするように世代交代していく人々の
価値観や暮らしが描かれている。
農村地域から流入してくる人々で膨張する北京は、
彼らの労働力と投下される資本をテコに、一気に
近代都市へと変貌を遂げようとしている。
今まさにその前夜の静けさが
漂っていた。

取材・構成……編集部
現地取材協力……原口純子
写真……シヲバラタク

変貌する北京・中国

文……大西 隆（東京大学先端科学技術研究センター・都市環境システム分野／工学系研究科都市工学専攻・教授）

都市化の大波

このところ中国に出張する機会が多くなった。今年は、少なくとも4回は出かけることになりそうである。中国から来訪者を迎えて日本でシンポジウムなどが開催され、そこに呼ばれるケースも含めれば、私個人にとっての中国との交流はもっと頻繁になる。もともと中国から留学生も多く、身近な国のひとつであるのは言うまでもないが、中国における最近の都市開発ブーム、爆発的な都市化が、それに輪をかける形になっている。

しかし、現在の活発な都市開発や都市化は、まだ予兆にすぎない。都市化の大波はこれから本格化するのである。中国では一人っ子政策が続いているので、子どもの数は1人の家庭が多い。これが完全に守られれば合計特殊出生率は1.0以下と日本より低い水準になるのだが、現在はそこまでは低くなく1.8程度であり、1.25になった日本や、すでに1.2を切っている韓国などに比べればまだ高い。

もちろん、長期的には人口が減少することを意味する値であるため、中国の人口は現在より1億人程度増え、14.5億人をピークに減少し始めると予想されている。世界の人口の20%が中国籍の中国人という巨大さに変わりはないが、それでも今世紀前半にはインドに人口1位の座を譲ると見られている。

だが、問題は都市人口である。中国の都市人口は現在も急速に増加中であり、2000年には4.5億人とされるものが、2030年には8.7億人程度になり、30年間に4億人を超える都市人口増加があると国連は予測している。これを受けて、最近確定した中国の11次5カ年計画では、都市問題が、それと表裏の関係にある農村問題とともに主要なテーマとして登場し、「積極的かつ着実に都市化を推進する」としている。こうして都市化、都市計画、都市開発が国家の重要施策となったことによって、中国各地でこのテーマでの国際会議が活発に開催されるようになった。

国際会議

そのひとつが去る6月に北京で開催された中国建設部等主催の「第一回中国都市計画・都市開発国際会議」である。約100の報告のうち、海外組織所属者によるものが半分を占めるという力の入った国際会議で、分科会のタイトルは別表のように多岐にわたり、中国において都市問題が非常に広範な観点から議論されていることをうかがわせるものであった。

会議には、外国人の報告者に加えて1000人近くの中国人研究者や実務者が参加し、文字どおり盛況のうちに進められた。

ところで、この会議にはもうひとつ仕掛けが施されていた。それは、共催団体にマサチューセッツ工科大学（MIT）が加わっており、留学先やリサーチの受託先としての宣伝活動が行われていたことである。実はMITだけではやや偏ってしまうと考えたのか、私の属する東京大学も招かれ、私は自分の報告に加えて、開会式で総長のメッセージを読み上げ、北京の清華大学で都市工学専攻のプログラムを紹介するという役割も務めることになった。東大の都市工学専攻でもこれまで多くの中国人が学んできたのだが、MITからは大挙して教授陣が参加していて関連イベントを繰り広げているのを見て、都市計画の分野においても、アメリカの大学がより緊密に中国と結びついていることを感じたのであった。実際、今回の報告者のなかにも、海外組織に属する中国人が多数含まれていたように、中国からアメリカなどの大学院で都市計画を学び、海外の大学や国際機関で働く中国人も少なくないのである。

留学先としてのアメリカの大学院の優位という問題は、実は中国に限らず、アジア諸国を訪れるたびに感じることである。世界でも評価される研究大国を自負する日本の大学は、大学院教育で多くの外国人を受け入れる用意があるのだが、泣きどころは言葉である。日本で学ぶのに日本語を覚えるのは当然、という考えもまだけっこう根強いのだが、ここにかかわっていたら、国際的には通用しない日本語の習得に多大な努力を求めるという障害を取り除けない。中国人に日本語を覚える苦労を強いることが、留学先として選択するうえで抵抗感を生んでいるのであれば、割り切って英語での教育研究を基本にするというスタイルを日本でも普及させることが必要になっているように思う。

進化する古都

短い滞在であったが、一夕、大学街に出かけて、旧友である北京大学の呂斌（ルビン）教授に会った。話がはずみ、彼らの調査に基づく提案によって話題のスポットに変わりつつある胡同（フートン）地区へ繰り出すことになった。ここは中国式民家である四合院が集積している場所で、その行方が注目されていた。

四合院は中庭を囲んで四方に建物のある閉鎖型の民家で、漢代に確立し、清代に至るまで建築されたというから、長い伝統をもった様式である。貴族の豪邸ではないが、少なくとも4棟からなる住宅は社会主義中国には許されない特権的な民家であり、現在では取り壊されたり、改築されて多くの家族が住むアパートに変貌したりして、見る影もなくなっているケースが少なくない。北京における四合院の集積地のひとつである胡同地区では多世帯居住にはなっているものの、比較的様式が継承されてきたのである。

しかし、2008年オリンピック開催でさらに加速した開発ブームのなかで、紫禁城の間近という好立地にある胡同地区の運命は予断を許さないものになっていた。呂さんが提案したのは、住宅として作られた四合院をレストランやブティックといった用途にコンバートして、観光名所のひとつにしてしまおうという大胆なものであった。

まだその動きは実を結び始めた段階といったところのようだが、それでもわれわれが寄ったレストランは、中庭にもテーブルを並べ、各建物の雰囲気を生かした、なかなか落ち着いた感じの店であった。いかにも西洋人が好みそうで、訪れたのはかなり遅い時間であったが、英語やフランス語の集団でにぎわっていた。周辺では道路拡幅、巨大マンション群の建設など再開発が進んでいるが、ここは中国の伝統を生かしたユニークな地区として生まれ変わり、生き続ける可能性がありそうである。

北京も巨大都市で、その変化を短時間で把握することは難しい。しかし、雑然とした活気のある東洋の都市といった佇まいから、落ち着いた大国の大都市へと変貌を遂げつつあるような印象をもった。主要街路には、縦方向に鉄柵が設けられ、自動車を方向別に分離している。交通事故の減少や渋滞緩和にどれくらい効果があるのかわからないが、少なくとも道路のどこでも勝手に横断する途上国式道路横断法はできなくなり、横断歩道を渡る人が増えた。これだけでも、車社会が定着した感がある。

住宅も刻々と改善されており、なかでも目を見張るのは、小河川を自然な感じに修復したりして、街のあちこちにアメニティに配慮した工夫を施していることである。高層ビルでも必ず屋根をつける北京のルールと相まって、近代的な街並みと、アメニティや景観豊かな街並みの二兎を追うことに成功しつつあるように感じたのである。

■第一回中国都市計画・都市開発国際会議分科会テーマ

第１分科会	国際化・情報化時代のキャンパス計画と計画教育の改革
第２分科会	都市計画及びデザインと地区詳細管理計画体系からの教訓と革新
第３分科会	都市の歴史的・文化的遺産の保全とその固有の発展と革新
第４分科会	中国及び諸外国における古い工業都市の再生体験と教訓
第５分科会	急速都市化地域における地域計画にみる競争、協調と地域計画
第６分科会	都市交通の機会、挑戦及び技術的提案
第７分科会	個別地域の開発議論の国際的展開
第８分科会	田園都市、緑の都市、環境保全都市と持続可能性
第９分科会	健全な不動産市場育成—海外における経験と教訓

北京 BEIJING

東城区
交道口街道西北部
南鑼鼓巷

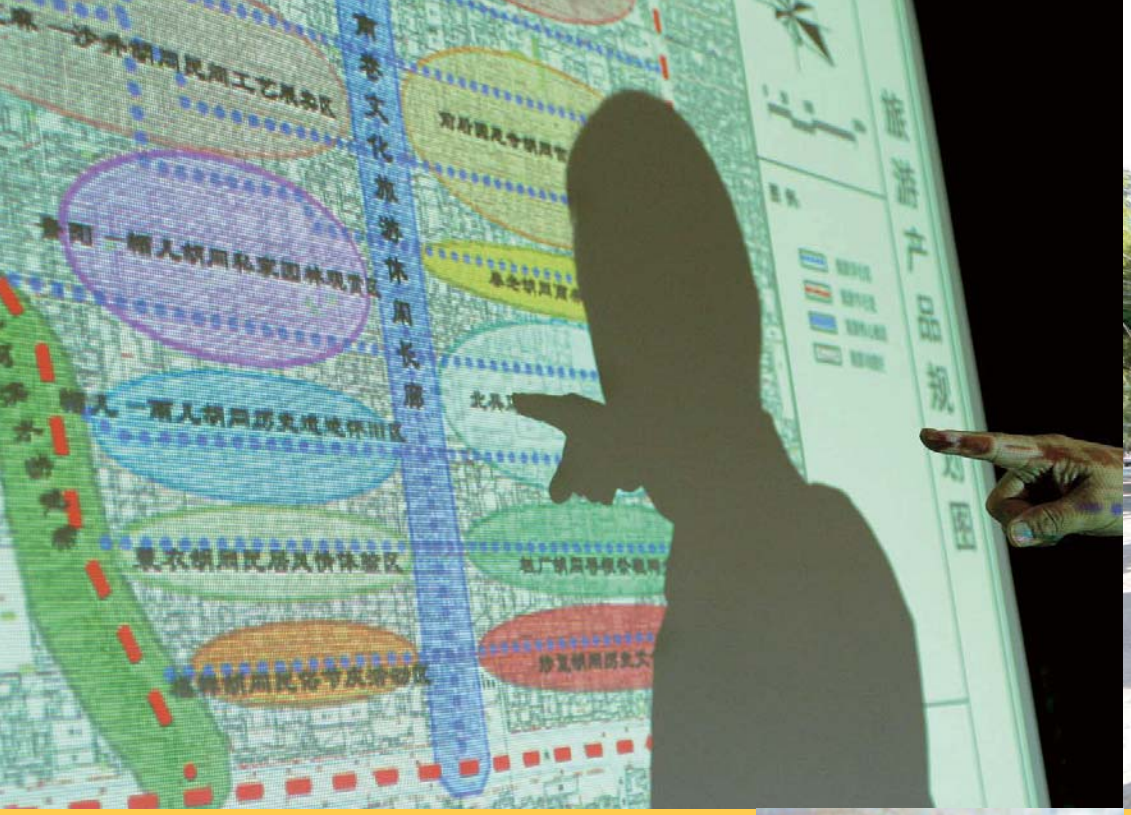
いにしえの生活を今に伝える
胡同（フートン）の街並み

住民参加のまちづくりの試み

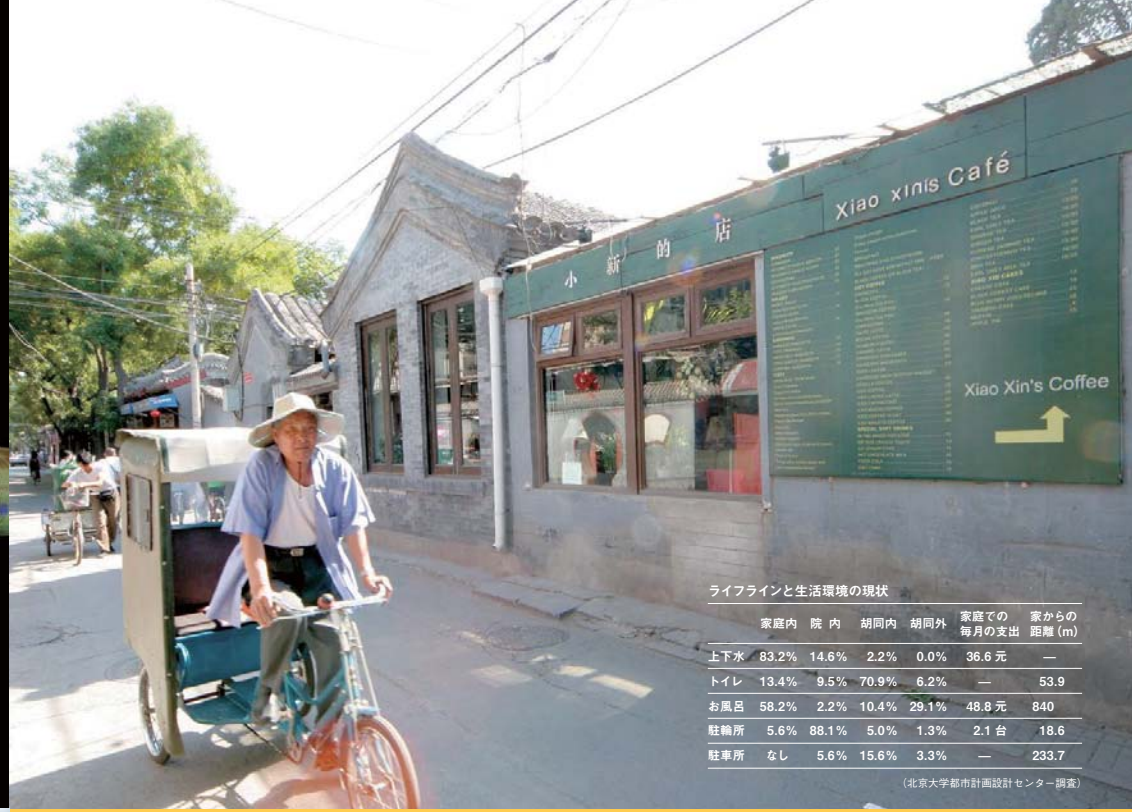
南锣鼓巷
NANLUOGU XIANG

故宮の外周には、胡同と呼ばれる細い路地が
網の目のように入り組む歴史的街並みの住宅街が広がっている。
元時代に始まり、明、清と形成された街並みは、
伝統的家屋構成である四合院と、この細い路地で形成されている。
近年の開発に伴い、築 200 年を超す四合院が次々と姿を消しているが、
その一方で 700 年前の元時代の建物が一部残っていることから、
貴重な胡同の代表的街並みを保存する計画が進んでいる。

［左］南鑼鼓巷（ナンロウクーシャン）の通り ［上左］南鑼鼓巷エリアの四合院。歴史的建物が法律事務所として使われている ［上右］鼓楼から鐘楼方面の眺め。右手には北鑼鼓巷（ベイロウクーシャン）の四合院の家並みが広がっている ［下］生活感あふれる胡同の風景



北京大学で呂教授が解説してくれた南鑼鼓巷に残る“魚骨状”の胡同形態



おしゃれなカフェが並ぶ南鑼鼓巷の通り

ライフラインと生活環境の現状

	家庭内	院内	胡同内	胡同外	家庭での毎月の支出	家からの距離(m)
上下水	83.2%	14.6%	2.2%	0.0%	36.6元	—
トイレ	13.4%	9.5%	70.9%	6.2%	—	53.9
お風呂	58.2%	2.2%	10.4%	29.1%	48.8元	840
駐輪所	5.6%	88.1%	5.0%	1.3%	2.1台	18.6
駐車所	なし	5.6%	15.6%	3.3%	—	233.7

（北京大学都市計画設計センター調査）

北京のまちの構造は非常にシンプルである。故宮を中心に、南は天安門広場や前門、北は景山公園、鼓楼、鐘楼へと延びる南北軸を、北京の人々は「龍脈」と呼び、都市計画においても重要な軸線として大切にしている。それは、2008年のオリンピック会場が、龍脈の北の延長線上に計画されていることからもうかがえる。これに直角に交わって京通高速公路につながる長安街の大通りが東西の中心軸となっており、さらに故宮を中心に第二環状道路から第五環状道路まで、ほぼ同心円状にまちが広がっているのである。

故宮の北にある交道口エリアは、元王朝時代の中心地で、“魚の骨”のような胡同の街並み構造が当時のまま残っている貴重な場所だという。このエリアの文化財資源調査を行っている北京大学都市計画設計センター主任教授の呂斌（Lu Bin）氏から、交道口エリアの中心部南鑼鼓巷（ナンロウクーシャン）の概要と保存計画について説明いただいた。

「私たちが調査をやっている南鑼鼓巷の調査範囲は、北は鼓楼東大街から南は地安門東大街まで、南北約786mありますが、今回の計画では南鑼鼓巷を中心に両側30～100mの範囲に限定し、総面積は6.24haとしました。

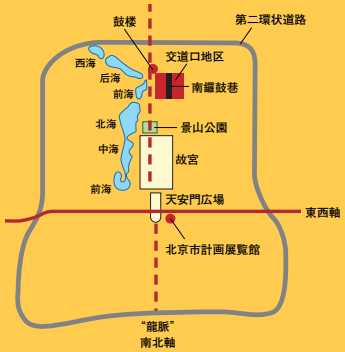
地区の骨組みは、中央の南鑼鼓巷を背骨として左右に8本ずつ、魚の骨のように小路が展開しています。このエリアの戸籍人口は約5.3万人。実際に住んでいるのは3万人程度で、ほかは短期滞在を含む流動人口です。1993年に北京市内の25カ所の地区が歴史文化保護区に指定されましたが、ここはそのなかで最も文化財資源としての質が高いところで、元王朝時代の“魚骨状”の胡同の形態が残っている代表的なゾーンです。明や清の時代とは、道幅や街並みの構造が若干異なります。

呂斌教授

このゾーンには553戸の四合院があり、文化財資源調査を行ったところ、有名人の住宅が多く、高名な文学者の生家や、蔣介石が北京に滞在するときに宿泊した『行苑』などがありました。しかし立派な四合院が数多く残っている半面、違法に増築されたものも多く、深刻な問題になっています。都市計画用途地域の分類によれば、このあたりは二類居住用地（R2）が多く、就業機会の少ない家主は増築して店子からの家賃収入に頼らざるを得ません。そのせいで増築に次ぐ増築が進み、元の姿がわからなくなっているのです。こういったところは家主と相談して段階的に撤去し、修復していく予定です。

また、このエリアには『中央戯劇学院』があり、コン・リーやチャン・ツィイーもこの学校の出身です。若いアーティストたちが古い四合院を生かしてセレクトショップやカフェ、おしゃれなレストランを開き、来街客を吸引しています。胡同巡りやバー街としては前海や后海が有名ですが、本格的な胡同を見せようと、輪タクがこのエリアを巡るようになりました。そこで、単なる通過観光ではなく滞留時間を増やすためにも、用途地域の見直しが必要になってくるでしょう。

街並み保存にあたっては、外部から企業を誘致するだけでなく、住民みずからが参加し、もともとあった文化資源を生かしながら観光地として成り立つように誘導しようとしています。それにはさらなる環境整備が必要で、給水、排水、電力、ゴミ、トイレなどの生活施設の充実や、ネット、有線テレビなどの現代的な設備、道路整備と電線の地下化、駐車場の確保、看板の規制などを徐々にやっていく予定です。南鑼鼓巷は国内外の地名度が高くなってきています。観光発展のポテンシャルはあるので、住民の意識を高めることが必要ですね」



中国の“まず立ち退きありき”のまちづくりから、住民参加のまちづくりへの挑戦が始まったようだ。

[前ページ] 夜になるとバーやレストランがの明かりが漏れ出し、人も増えてにぎやかになる
[上] 海外からの観光客も年々増えている
[下左] 南鑼鼓巷にあるカフェを手伝う彼女は映画プロデューサー志望
[下中] おしゃれなセレクトショップの店員（写真：編集部）
[下右] 中央戯劇学院に通う学生の姿が目立つ（写真：編集部）

工場の骨太な空間をそのままギャラリーにした「798 時態空間」。壁面に書かれた「毛主席万歳、万万歳」のスローガンをそのまま残している

●黄鋭（ファン・ルイ）プロフィール
1952年生まれ。80年代半ばから改革解放後の中国の、最も初期からのモダンアーティストとしてパフォーマンスなどの分野で活躍。84年日本へ。2001年末から活動の拠点を北京に移し、「北京798芸術区」の再生に大きくかかわる。毎年5月に開催される798芸術区国際フェスティバルプロデューサー。THINKING HANDS思想手設計・計画アートディレクター。

黄鋭氏たちが出版した2冊、写真集『798』と798 厰の国営工場時代の歴史と今日までの活動を写真と文で綴った『北京 798』

北京 BEIJING

北京市朝陽区
酒仙橋路 4 号

中国現代アートの発信地

「北京 798 芸術区」

文化都市"北京"の象徴空間

近年の世界の美術オークション市場では、取引総金額において
クリスティーズやサザビーズを抜いて北京嘉德（ジャーダー）が 1 位になっているという。
上海が商業の中心地であるとすれば、北京は政治・文化の中心地。
その「文化」が一大産業に成長しつつある。
そんなチャイナアート発信地の代表格が「北京 798 芸術区」だ。

かつて人民解放軍798部隊に所属する国営電子部品工場だったこの建物群は、1950年代、中国と友好関係にあった東ドイツの建築家によって建てられたバウハウス風の建築だ。1980年代後半、経営不振により工場の一部が閉鎖。その作業場に、国立北京中央美術学院の学生らが自由な創作活動の場を求めてアトリエを構えるようになる。2002年秋、空間のおもしろさと低賃料に惹かれ、アーティストや東京画廊などの商業ギャラリーが敷地内に進出。その後一気に認知され、今では、大陸のギャラリーはもちろん、イタリア、ドイツ、台湾、韓国と各国のギャラリーや、広告、雑誌、デザインなどのオフィスが進出し、北京屈指のクリエイティブスポットになっている。

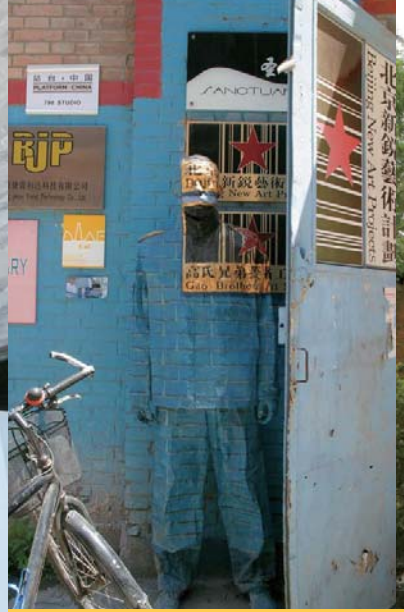
この「北京798芸術区」をプロデュースしたのが、アートディレクターでアーティストでもある黄鋭（ファン・ルイ）（Huang Rui）氏である。1984年から日本に滞在したこともあるという氏は、チャイナアート隆盛の機運をいち早く察知し、2001年に北京に戻ってアトリエ空間を探していた折に、この空間と出合った。

「この国営798厰（しょう）を見つけたときは、まさに自分のやりたいことが実現できる空間だと興奮したものです。そして工場のオーナーである七星集団とすぐに契約を交わしました。そして日本の東京画廊にこの場所を紹介し、彼らとともに、この場所の再生プロジェクトを進めてきました」と黄氏。黎明期から未来の「北京798芸術区」について話を伺った。

2002年秋に一部改造作業が終わり、東京画廊がオープンした。そのオープニングに訪れたゲストたちが驚きとともにこの空

敷地内に設置された案内板（写真：編集部）

ギャラリーコントラストで開催されていた家具展



敷地内にはさまざまなアートが施されている。右はチャイナインタラクティブメディアグループのオフィス前に置かれた巨大な人民服のオブジェ

間の可能性に魅せられ、競って借りていったという。順調にギャラリーやアトリエが増えていった2003年の夏、黄氏たちは工場側から、古い工場を取り壊し、新しい開発計画ができていることを通知された。それは「電子城」と呼ばれるプロジェクトで、1990年代に北京市と江沢民率いる中央政府が構想した、エレクトリック関連企業を集めたサイエンスパーク計画だった。西側の北京大学近くにひとつ実現しており、東側としてここに計画された。現在でもその計画は生きていて、パナソニックやフィリップス、シーメンスなどの誘致が決まっている。

「通知を受けて借主50人が集まり、今後どうするかの討論会を開きました。さまざまな意見が出されましたが、私はアートフェスティバルの開催を提案したのです。その後、半年かけて主に3つの成果を挙げました。ひとつは2004年の3月に北京市人民代表会議に工場保存の意見書を出し、相当数の同意署名をもらったこと。ふたつ目は、2004年の4月にアートフェスティバルを開催したこと。3つ目は、ここに集まっているアーティストを、彼らの作品を前に撮影した写真集『798』と、798厰の国営工場時代の歴史と今日までの活動を写真と文でつづった『北京798』という2冊の本を出版したことです。この本を100人の政府関係者に配りました。このような地道な活動が奏功して、保存が実現したのです」

さらに彼らの活動を後押しする大きな流れがあった。中央政府が北京市を、工業・経済だけでなく文化・芸術産業の分野においても中心地にするという方針である。それに沿う形で、北京市と朝陽区によって「朝陽区を文化発展の重点エリア」に決められた。また、黄氏らがさまざまなメディアに情報発信してきたことで、世界からも注目を浴びた。例えばアメリカの雑誌『フォーブス』や『ニューズウィーク』では、中国の魅力を生む重要拠点として「北京798芸術区」を紹介している。以来、国内外の指導者たちがここを訪れることが多くなった。

「先週もEUのバローゾ委員長が来訪されました。ドイツのシュレーダー前首相も2度訪れています。そのほかスイス、ベルギー、オーストリアの首相など、たくさんの政府関係者も。特にアートフェスティバルが行われている期間は、各国の大使が来訪されます。日本の小泉さんは来られていませんが、かわりにアーティストが作った彼のフィギュアが来ました（笑）」

中国では、アーティストグループは政府系（共産党系）と非政府系（非共産党系）の二派に分かれていて分立関係にある。例えば政府系の美術協会がヴィエンナーレを開催する場合は、非政府系のアーティストには声がかからないのが常だ。ここ「北京798芸術区」は非政府系だが、海外からの注目が高まったこともあり、政府としても彼らの活動は無視できないものとなった。今年のアートフェスティバル（2006年4月29日～5月21日）ではオープニングに2万人、会期中3週間で10万人以上が訪れ、その多くは海外からのツーリストだった。いまや「北京798芸術区」は北京の国際性と開放性のシンボリックな存在になっている。

「政府にとって最終的には、投資に対する経済効果があるかどうかが重要です。北京市はここを国際的な消費都市として発展させたいと考えているようです。いま国内だけでなく世界の投資家が投資先を求めてやってきています。『北京798芸術区』は、ここ自体が投資の対象であり、また消費の舞台でもある。現在建設中のCBD（中央ビジネス区）には500近い世界の優良企業が入る予定だというから、ものすごいポテンシャルが北京に生まれるわけですよね」

北京では今、外国人が来てチャイナアートを買いあさっていくアートバブル現象が見られる。北京市政府は文化的創造産業分野に10億人民元（約150億円）の予算をつけ、「北京798芸術区」を含む12カ所が予算の対象となった。

敷地内ではいまだに稼動している工場がいくつかある

「ここの場合は、主に環境を整えるというハード面に予算が使われます。実際、オーナーの七星集団、われわれ借主側、そして朝陽区の政府などを交えた会議ではさまざまな未来像が議論されます。敷地内では一部が、いまだに軍事工場として稼動しています。現在プロジェクトを主導しているのは主に朝陽区で、彼らは小さい建物を壊して大規模施設の建設プロジェクトを考えていますが、私たちは反対しているんです。改造していくうえでも、あえて古いものを残すように努めています。北京では歴史を感じられる場所が少なくなっていますから、よけいに貴重になるでしょう。古い歴史と最新のアート活動といった新旧の共存を見ることができる、それがここの最大の魅力ではないでしょうか」

798の北側に706という6000m²の空地があり、近い将来、グッゲンハイム美術館が進出するという構想がある。しかし、こうした大きな施設が来ると一時的にはよくなるが、長期的にはかえってマイナスになると彼らは考えている。ニューヨークのソーホーがそうだったように、資金力のあるところだけが残り、多様性が失われて活力がなくなってしまうと危惧しているのだ。

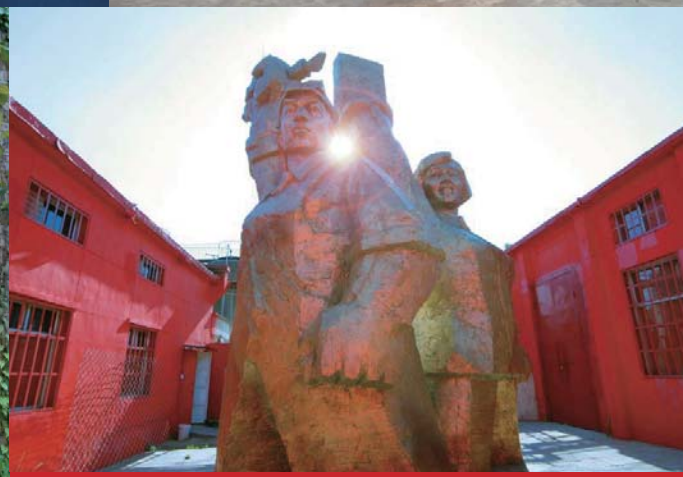
「われわれはすべてに反対するのではなく、具体的なアイデアをぶつけていこうと思っています。2010年くらいまではこの調子でいけるでしょうが、その後はどうなるかわかりません。しかしこの先、北京が“文化都市”を標榜していくことには間違いありません」

非共産党系のアーティストたちは、大きな力に太極拳のようにバランスをとって対応していくことができると話す黄氏。1980年代にアンダーグラウンド化したエネルギーがたぎる中国のアートが、これからまだ“世界に効く”力を発揮するだろう、と強く語った。

コリアンパワーが炸裂する新しいアートスポット「酒工場芸術区」

クールな敷地に加熱するアートビジネス

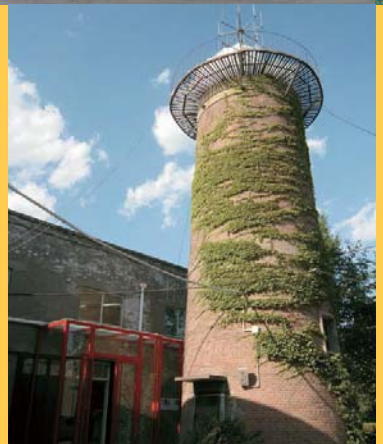
カフェが併設されたアラリオ北京・スペース1



[上左] 工場の建物そのものをペイントして活用している
[上右] スペース1ではドイツのアーティスト、トーマス・ラフの展覧会が開催されていた（2006年5月26日～6月30日）
[下左] 背景と同化した人体のアートがここにも
[下右] 中国を象徴するような赤い壁の囲まれたプロレタリア彫刻

「酒工場芸術区」は、朝陽区の北側、北京首都国際空港に程近い、かつて国営酒造工場があった6万m²の敷地の一部に忽然とできたアートスポットだ。入り口を入ると「MADE IN CHINA」の巨大な看板を掲げた、ツタに覆われた建物が出迎える。敷地内は低層レンガ造りの建物をそのまま生かし、赤や青などカラフルにペイントした外壁を背景に屋外彫刻が置かれ、さながらデ・キリコの絵のようなシュール感が漂う。ここには100あまりのアトリエやギャラリー、デザインスタジオのほか、心地よさそうなカフェやレストランがあり、アートを鑑賞しながら一日のんびりするにはもってこいの場所になっている。

この場所を一躍有名にしたのは、韓国現代アート界のリーダー、1951年生まれのシー・キム（Ci Kim）氏が率いるアラリオグループが、総面積2300m²の3つの大きなギャラリーを2005年12月にオープンさせたことだ。シー・キム氏は、イギリスやドイツの貴重なアート作品を多数かかえるコレクターであり、またシネマコンプレックスや百貨店、飲食店を営む事業家の顔を持ち、自らがアーティストでもある。1989年に、ソウルから1時間半ほど離れた彼の実家である天安にアラリオギャラリーをオープンさせ、近年はアジアのアーティストに注目している。



アラリオ北京のキュレーター・郭埈瑛さんはオーナーについてこう語る。「Mr.シー・キムはここを足場に世界美術市場への進出をめざしています。今年の9月にはインドのアーティストの個展を初めて北京で開催する予定ですし、来年には日本の中村政人氏の展覧会も企画中です。Mr.シー・キムは東西の結節点となる新しいシルクロードをつくるつもりなのです。アラリオ北京はアジアのアーティストの拠点になっていくと思います」

『ビューティフル・シニシズム』*と題したオープニング展では、アメリカのシンディ・シャーマン、イタリアのヴァネッサ・ビークロフト、ドイツのアンセルム・キーファー、中国の王廣義、韓国の全瑢晧をはじめとする東西のアーティストを招集。さっそく世界のアートシーンの話題をさらった。ここ「酒工場芸術区」は、なによりコリアンパワーの磁場となりそうだ。 NE

*『ビューティフル・シニシズム』と題したオープニング展は2005年12月10日から2006年3月12日の間、開催された。

北京の未来を担うCBD（中央ビジネス区）

新しい都市生活を提案するディベロッパー・SOHO中国（チャイナ）の躍進

高級マンション「SOHO現代城」「建外SOHO」のディベロッパーとしてその名を知られた紅石（レッドストーン）社。現在は「SOHO中国（チャイナ）」と社名変更し破竹の勢いで北京のCBD（中央ビジネス区）に高層ビルを建て続けている。2001年に、CBDに完成した「SOHO現代城」は、中国で初めてSOHO（Small Office、Home Office）というコンセプトを全面に打ち出した複合ビルだ。当時まだ不動産市場が成熟していなかった北京では大胆な試みだったが、1998年の販売当初から好調な売れ行きで話題となり、人々の潜在的購買力を実証した。設計は中国建築設計研究院で総建築師を務める1957年北京生まれの崔愷（ツィカイ）（Cui Kai）。彼は中国建築家のなかで注目されているひとり。7.3万m²の敷地に、延べ面積48万m²。6つの住居棟（1385室）と4つのSOHOタイプのオフィス棟（512室）とがある。敷地内には中国人アーティストによるパブリックアートが多数置かれているのも特徴だ。

BEIJING 北京

SOHO現代城：北京市朝陽区建国路88号

建外SOHO：北京市朝陽区東三環中路39号

2001年にCBDに完成した「SOHO現代城」

「SOHO現代城」にあるSOHO中国のオフィス。白を基調にしたギャラリー空間のようなエントランスホール。一躍時の人となったSOHO中国の社長夫妻、潘石屹（パン・シイ、Pan Shiyi）氏と張欣（チャン・シン、Zhang Xin）女史は、いまやチャイナドリームの典型になっている

SOHO中国の設計室。手前に「建外SOHO」のコンペに参加した3社の模型が展示されている

日本流、超クールな空間「建外SOHO」

「SOHO現代城」に続き2001年に着工した「建外SOHO」は、国営第一機械工場の跡地12万m²に建設された。オフィス棟、住居棟合わせて18棟、延べ面積80万m²。設計は、日本の建築家・山本理顕氏。低層階には、C+A(シーラカンス)、みかんぐみが参加。敷地内には、16本のストリートが走り、低層階の店舗は300棟。前衛的なプロジェクトとして北京でも大きな話題となった。購入者は三十～四十代のベンチャー企業経営者が多いという。

さらに今後も、韓国の建築家・承孝相(スン ヒョサン)(Seung H-sang)による「朝外SOHO」、オーストラリアの建築家、ピーター・デビッドソンによる「SOHO尚都」などが完成を控えている。 NE

"北京に現れたクールな中国"と評された「建外SOHO」。高級志向の若者が集う

「建外SOHO」[左上]住宅を兼ねているので守衛が警備している [左下]白く浮遊感漂うモデルルーム [右]歩行者道路とサンクンガーデンが立体的に交差する足元空間

北京「建外SOHO」を設計して

山本理顕氏(談)

中国はいま高度成長期で、ものすごい勢いで分譲住宅が建てられていますが、技術的に限界があるのでかなりの粗悪品が目立ちます。そういった技術的な制約があるなかで、完成度の高いものをつくるにはどうしたらいいかを考えました。デザインはなるべくシンプルに、高層タワー内部に卍型の耐震壁をつくることで立面の柱寸法をできるだけ細くしました。平面は27×27mの細い建物で、高さが40～100m、街区の北側にいくほど高層棟を配置しています。北京の南北軸から25度振って配置し、東西南北すべての面に日照を確保するようにしました。

部屋の面積は75m²からメゾネットタイプの397m²まで数タイプあり、標準面積は160m²とかなり広くなっています。中国では住戸の内装はオーナーが自分で行うのが一般的ですが、今回はあらかじめ内装を施していることもあり、標準タイプの価格は日本円で約4000万円とかなり高価です。また、通常中国の分譲住宅は壁とゲートで自分の敷地を囲ってしまうのですが、ここではそれを造らず、誰でも入ってこられる街としての機能を重視しています。

1～3階はもともと商業施設用途で、予想以上にさまざまな業種の店舗が入っています。単価は高めで、スターバックスコーヒーの値段は昼ごはん代より高いものの、おしゃれな雰囲気を味わうために高額を支払う都市生活者が増えているようです。『アーキテクチャル・レコード』誌の2006年中国住宅建築部門で最高賞を受賞しました。中国の現代建築は単に外観の形態を競い合うような、街に対しモニュメンタルなものが多いのです。そのなかで、シンプルなデザインとライフスタイルに対する提案とが、評価された大きな要因ではないかと思っています。

SOHO中国の張欣女史も、「建外SOHO」をつくってみて、こういうものが人々の購買力を刺激すると同時に、都市に貢献できるということを強く実感したようです。アジアだけでなくヨーロッパも同じですが、都市のなかでどのように人が住んでいくのかは新しいテーマです。それぞれの国、都市がもつ独自の歴史やノウハウ、新しい技術、高齢化などの社会的要請を考えて、建築家がどう対応するかが大切です。

●**山本理顕**(やまもと・りけん) **プロフィール**
1945年北京生まれ。68年日本大学理工学部建築学科卒業。71年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了後、東京大学生産技術研究所原広司研究室研究生。73年(株)山本理顕設計工場設立。02年より工学院大学工学部建築学科教授。「埼玉県立大学」で日本芸術院賞、「公立はこだて未来大学」で日本建築学界作品賞受賞ほか。

北京は魅力のない都市だ

艾未未（アイ ウェイウェイ） Ai WeiWei

2008年開催のオリンピックナショナルスタジアムの設計に、ヘルツォーク＆ド・ムーロンと共に参加している中国で最も有名なアーティスト艾未未氏のアトリエを訪ね、変貌する北京や彼の仕事について話を伺った。

コンペで話題となったオリンピックのメイン施設ナショナルスタジアムは、スイスのヘルツォーク＆ド・ムーロンと北京のアーティスト艾未未による共同設計。24本の巨大な鉄骨がまさに"鳥の巣"のように絡み合っている。建築面積は25.8万m²。9万1000席が用意されるという

北京 BEIJING

［インタビュー］
艾未未

艾未未設計による自邸。アトリエ、ギャラリー「芸術文件倉庫」を備えている

――激変する北京をどうご覧になっていますか。

オリンピックがあるなしに関係なく近年北京は建設ラッシュです。毎年億平方メートル単位の開発が進んでいます。しかしオリンピック開催によって、ナショナルスタジアムやレム・コールハース設計の中国中央電視台(CCTV)など大きな建物を建てる理由づけができたといえるでしょう。

中国の変化というのは、農村から都市に大量の人口が流れ込んできたということです。しかし都市のインフラはそれに対応できていません。老朽化し、不足しているわけです。また北京市を走る車の台数は120万台といわれていますが、毎年数十万台ずつ増えていっている。ですから現在の建設ラッシュは都市として避けられないことだと思います。

これだけ大きな変化が起きていますが、何かをつくるときの決定理由というのが中国独特のとても遅れた体質のなかで決められます。そこには専門的な思想や美学や哲学は不足しています。全体としては都市のランドスケープというのは遅れた状況にあると思います。

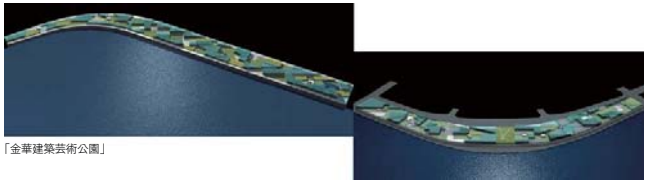
――中国アートの状況は？

今の段階でアートがランドスケープに力を及ぼしているということはないと思います。ただ自分のつくった作品は影響力を発揮していると思いますが、全体的には大きな結果を生んでいるとはいえないでしょう。中国のアートに関していえば、ここ数年国外から注目を浴びているし、潜在力もあり、世界でいちばん活発な状況にあると思います。

――オリンピックナショナルスタジアムのデザインに参加されていますね。

デザインに関してはヘルツォーク＆ド・ムーロンの会社と一緒にやっています。第1段階からデザインに参加し、機能と形状と材料を決めました。スタジアム自体は編まれた鳥の巣のような形状になっています。スタジアムの外構、周辺のランドスケープデザインは私が担当しています。スタジア

「金華建築芸術公園」四阿のデザイン例



「金華建築芸術公園」

「金華イーウー川南護岸」（本誌６号で紹介）

浙江省の金華イーウー川南護岸のデザインが話題となり、新たに計画された「金華建築芸術公園」。国内外17人の建築家、アーティストによる17の四阿のある公園が2006年完成予定。平均幅80m、長さ2.2km。北京の張永和、北京ナショナルスタジアムの設計者ヘルツォーク＆ド・ムーロン、ハーバード大学建築学部長の森俊子らが参加している

2006年4月オープンした艾未未設計の麦勒画廊（上）と展示された氏の作品「破片」（下）

ムはまるで台の上に乗っているかのようになだらかなスロープに取り巻かれることになります。スロープに埋もれた地下2層に駐車場、コントロールシステム、セキュリティシステムを集積させています。またそのスロープにはサンクンガーデンをつくり、地下からの入り口を設けました。

――浙江省金華の護岸デザインが評判です。

金華のイーウー川南護岸の場合はとてもうまくいきました。中国でも日本と同じで土木工事にアーティストが介入することは難しいのです。最初は川べりの単なる公園の設計依頼だったのですが、護岸のデザインを強くアピールしたことで、ようやく私のアイデアを採用してもらいました。

この護岸がたいへん好評だったので、その後、対岸の公園のデザインも依頼されました。ここでは17の四阿（あずまや）のある公園を提案したところ受け入れられたので、17人の建築家、アーティストを選定し、四阿のデザインをお願いしました。ここでのコンセプトのひとつは“小さい”ということです。中国では何か建造物をつくる場合、常に巨大なものになりがちです。そこであえて“小さい”ということにこだわりました。それから“スピード”“現実性”という3つのキーワードをコンセプトに据えました。ファストフードのような速さは都市にとって必要なことだと考えています。このプロジェクトは2004年9月に始まり2006年に完成する予定です。現在90%ができています。

――今後の仕事についてお聞かせください。

北京をテーマにした作品「BEIJING　10／2003」は、北京の中心部を16エリアに分け、2003年10月に16日間かけて、1日1エリアをゆっくりしたスピードで車の中からビデオで撮影したパフォーマンスです。全行程約2400km。ビデオ作品としては世界で最長の150時間の作品になっています。また、撮影したビデオの5分ごとのシーンを記録し、一冊の本にしました。

私にとっては都市を観察するパフォーマンスとして行いました。これをやって感じたのは、北京は魅力も吸引力もない都市で、それが特徴なのだということです。今は都市に対して何か魅力を創生しようということに関心はありません。むしろ個人的な作品をつくっていくことに魅力を感じています。自分の興味の赴くままにプロジェクトをやってみたいと思っています。

現在、雲南省昆明で「100人のアーティストのアトリエ」という政府のプロジェクトを進めています。これは風景と建築の融合を目指したもので、山の中に100軒のアトリエとなる住宅を設計しています。また朝陽区の芸術東区と呼ばれる地区に、私が設計した画廊「麦勒画廊」が最近オープンし、その空間のための作品をつくりました。そのほかにも美術批評を書いたり、取材を受けたりと、やることはたくさんあります。

この4年間に40プロジェクトほど手がけています。なかでもナショナルスタジアムが最大のプロジェクトですが、特に栄光だとは考えません。そこにどういうものをつくるのがいいかを考えるのが好きなのです。作品をつくる出発点が「国家のために」というところにはないのです。創造する権利は天が与えてくれたものですから。

私は日本で、ぜひ一度仕事をしたいと思っています。先日も招かれて日本に行きましたが、日本はおもしろいですね。 NE

●艾 未未（アイ・ウェイウェイ）**プロフィール**
1957年北京生まれ。78年北京電影学院卒業後、81～93年ニューヨークに留学。以後、北京を拠点に活動。アート、インテリア、建築、ランドスケープ、都市計画など幅広く展開している。96年に設立したギャラリー「芸術文件倉庫」のキュレーターとして、中国の若手アーティストの展覧会を企画するかたわら、ヘルツォーク＆ド・ムーロンと協働する北京オリンピック国立競技場のコンサルタントもこなす。

激動の中国に立ち会う

ファン　ツェンニン
方 振寧
Fang Zhenning

1955年中国南京生まれ。アーティスト、文化ジャーナリスト。82年国立北京中央美術学院卒業。88年来日、東京、横浜、福岡、埼玉などにパブリックアート作品がある。現在は日本と中国の両方に拠点を置き、主に雑誌やウェブで現代文化の報道・評論を行っている。

北京から逃れて日本へ

私は1988年から15年ほど日本に住んでいました。北京から日本に引っ越すときは、すべての荷物を持ってきました。それは中国に二度と戻りたくないという気持ちからでした。天安門事件（1989年）の前でしたが、中国が迎える混乱を予測していたのです。

日本の女性と結婚して、現在、国籍は日本です。日本では、日本の現代美術や建築について日本や中国の雑誌に紹介してきました。また、そういった評論活動以外にもアーティストとして作品制作を行っていました。95年に横浜美術館のギャラリーで個展をやって以来、横浜市上大岡の再開発のアートプロジェクト、博多リバレインの企画でホテルオークラ福岡の換気塔に漢字を使ったアート、大森駅、埼玉大学に光の作品などを手がけました。日本でバブルがはじけたあとは、次第にパブリックアートの仕事が減っていきました。

私は日本でいうところの芸大にあたる国立北京中央美術学院出身です。ここで版画を専攻していました。本当は清華大学の建築学科で建築を勉強したかったのですが、数学が得意ではなかったのであきらめました。日本に行った際、安藤忠雄の本で「光の教会」を見てショックを受けました。建築とアートは近いと。それ以来、建築展を見て回りました。日本にいたことで世界中の最先端の情報に触れ、また中国に情報提供してきました。六本木ヒルズを最初に中国のメディアに紹介したのは私です。

北京が文化の中心になる予感

2000年ごろから北京と行ったり来たりしていましたが、最近は北京にいる時間が長くなっています。その理由は、これから北京は世界のアート、文化交流の中心になっていくと思われるからです。同時に実際、中国での仕事も増えてきています。

2001年のヴェネツィア建築ビエンナーレで初めて中国の建築が紹介されました。初めて中国人の建築家の名前が出てきたのです。それが張永和（ヤンターチン）（Yung Ho Chang）でした。美術、映画、文学、音楽に比べて中国の建築の発展は遅れていましたが、ようやく「中国の建築の時代が来る」と感じたのです。

以来、建築ビエンナーレには毎年参加しています。2003年には「万里の長城プロジェクト」でSOHO中国が受賞しています。SOHO中国の張欣女史（チェンシン）と潘石屹（パンシーイー）氏はたくさんのジャーナリストを招待して取材させています。以前、今はない東武美術館（1992年オープン、2000年閉館）でアジアの建築家たちを集めた建築展が行われ、そのオープニングパーティで張欣女史に会いました。彼女はこのとき、「私は建築をコレクションしたい」と言ったのです。これはそれまでの中国人の発想ではないと思いました。これこそが次代を担うチャイナパワーだと直感したのです。

世界から注目される中国

1996年、TNプローブで初めてレム・コールハース展を見て、これからアジアにレム・コールハース旋風が巻き起こる予感がしました。中国人で彼の名前を知っている人はいませんでしたが、ハーバード大学ではすでに中国建築の研究チームをつくっていたようです。そして2002年、中国中央電視台（CCTV）のコンペでレム・コールハースがみごと1等をとりました。

とにかく、オランダの建築家がこれほど中国に注目しているのに、私はあまり中国が好きではなかったことを反省しました。しかしSOHO中国などの動きをみると、これから力を増してくると思っています。経済のデータから一目瞭然です。世界から資金が集まってきています。日本の株が上がらないのも、ヨーロッパの投資家たちが中国に投資しているからです。

歴史上なかった都市の改変を目撃する

私は最近「中国に投資するということは世界の未来に投資することだ」と言っています。先日、イギリスのオークションでエリザベス女王の所有品を、予想価格の5倍で中国人が落札したそうです。今年秋のサザビーズのオークションでは、モディリアーニの絵を買いたいという中国人が出てきているそうです。これまで自国の書や水墨画などが中心でしたが、いよいよヨーロッパ絵画に触手を伸ばし始めています。文化大革命ですべて破壊されたドン底から這い上がっているのが今です。中国人は表現が率直で、アメリカ人に似ています。オークションでも画商など頼まずに自分で顔を出して自分でやります。最初はルールを知らなくても、すぐにマスターします。中国人はすべてのルールを信用していません。自分でルールをつくりたいのです。

まさに中国はバブルです。私は中国がまずアートビジネスの中心になり、その後、アートそのものの中心になるとにらんでいます。実際、国際交流基金（ジャパンファウンデーション）が開催する現代美術の最も大きな展覧会を中国で準備しているようです。

中国の分母は大きいので、バブルがはじけるまでには日本の何倍も長く続くと思っています。これは日本もそうでしたよね。いま中国のCBD（中央ビジネス区）はかつてのニューヨークのマンハッタンのようになるでしょう。北京では、2008年まで60プロジェクトが同時に動いています。スケールや資金力において人類の都市史ではなかった規模の変化です。中国らしい大量の自転車が行き交う風景が、あっという間に車に取って代わられましたね。政府はようやく環境問題の視点から反省して、自転車専用道路をつくるように呼びかけています。この歴史上初めて直面する都市の変化を、ここに身をおいて体感するつもりです。（談）

北京
BEIJING
北京市崇文区
前門東大街 20 号

北京の過去、現在、未来が一望できる

北京市計画展覧館

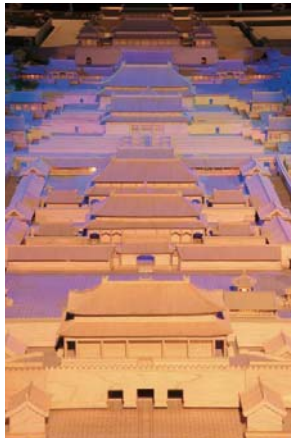
[上] 現在の北京市の都市計画が映し出されるフロア
[左下]北京周辺部の空撮が足元に広がる(写真:編集部) [右下] 元王朝時代の故宮の模型 [次ページ上] 750分の1の縮尺で302m²ある北京市の模型

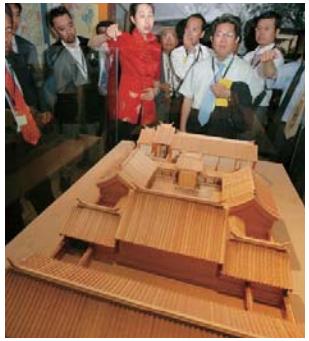
北京市計画展覧館は、北京市の悠久の歴史を紹介し、現代の都市計画と未来の姿を宣伝する施設で、延べ床面積1万6000m²、展示面積8000m²と広大なフロアを有している。

750分の1の縮尺で302m²ある北京市の模型は圧巻で、中心部以外は同じ縮尺の空撮写真が広がる。北京市を一望できるこの模型から、「龍脈」と呼ばれる南北軸線上に重要施設が置かれていることがわかる。

約400m²ある3D映像ホールでは、120度の視野を持つ曲面のスクリーンが設置され、ヴァーチャルリアリティを駆使した北京850年の歴史を紹介する映画を上映。また2008年までに完成する近未来のCBD(中央ビジネス区)を3D映像で紹介している。

そのほかにも、北京オリンピック関連施設や新空港、また典型的四合院や清時代の故宮の模型など、北京の歴史を一望でき、都市建設への強い情熱と意欲を感じさせる施設となっている。 NE





[上] CBD(中央ビジネス区)の将来模型。林立する高層マンションやオフィスビル、レム・コールハース設計による中国中央電視台(CCTV)も見える。故宮からわずか5kmの場所に未来都市が出現する [左上] 四合院の模型 [左下] 北京市計画展覧館外観

佐藤啓二専務理事
（再開発コーディネーター協会）

王女史
（中国建設部）

21 世紀はアジアの世紀

（社）再開発コーディネーター協会主催
第３回アジア圏海外視察：北京市再開発調査団報告

北京市都市計画設計研究院での日中専門家会議

宋高級工程士
（北京都市計画設計研究院）

秦副院長
（天津市都市計画設計研究院）

任致遠副会長
（中国都市計画協会）

河野擴国際委員長
（再開発コーディネーター協会）

宮原義昭理事
（再開発コーディネーター協会）

中国建設部の建物

始まった東アジアにおける専門家の交流

「都市再開発専門家・ASIA国際交流会議」と銘打った国際会議の第1回が開催されたのは、2005年10月20日のこと。

東アジア地域の急速に変貌する都市のありようは、東京オリンピック以後の高度成長期からバブル崩壊に至る日本の都市の変容ぶりと重なる部分が多い。環境問題や都市と農村の地域格差など直面する課題に、専門家として国境を越えて知恵を出し合おう、というのがこの会議の趣旨で、韓国、台湾、中国、日本の都市再開発に携わる専門家集団、韓国鑑定院、台湾の（財）都市更新研究発展基金会、中国都市計画協会の賛同を得て実現した。

この交流会議は（社）再開発コーディネーター協会（伊藤滋会長）が設立20周年記念事業のひとつとして企画・主催したもので、4団体が2年に一度の持ち回りで継続開催を約束。都市再開発に関する情報交換や、人的交流を通して相互理解を深める第一歩となった。

第３回アジア圏海外視察：北京市再開発調査団に同行

再開発コーディネーター協会では、4団体交流の一環として2002年台湾、2004年韓国訪問に続き、2006年は、北京市の都市再開発事情視察を兼ね、交流会議の参加団体である中国都市計画協会を訪問することとなった。この企画に、われわれネルシス編集部も同行させていただいた。

6月15日、北京市西部の甘家口地区にある中国建設部を表敬訪問。中国側からは鄭外事司長（局長）、楊処長（課長）、王女史が出席。昨年、都市再開発をテーマにイギリスを視察したという中国建設部からは、中国でも都市再開発は重点施策であることや、中国の大規模開発への日本企業の積極的参画の要望が出された。具体的には、円借款（予算8億～9億人民元）で内モンゴル自治区の再開発プロジェクトが今年からスタートすることなどが公開された。また、日本の関連団体とはこの20年、友好的に交流していること、今後もこの分野での日中交流を強化することが告げられた。

これを受けて佐藤啓二専務理事からは、再開発コーディネーター協会の組織と歴史、再開発プロジェクトのこれまでの実績などが紹介され、東アジア各国の都市再開発の手法について、相互研究や各国間の友好交流の必要性が語られた。

この後場所を移し、日中専門家会議が開催された。中国側から北京市、天津市、河北省の都市計画の主要メンバーが参加。中国都市計画協会の任致遠副会長と佐藤専務理事があいさつを交わし、会がスタートした。

北京市都市計画設計研究院の宋高級工程士から、1990年から始まっている旧市街地改造プロジェクトについて以下のような発表があった。（1）1990年に中国政府が住宅環境改善を目的とした旧市街改造プロジェクトを発表。その後4回にわたる改造工事を実施。改造面積は14km²。1999年までに住宅地150カ所、16万戸が立ち退きとなった。（2）2005年に新しい都市計画を批准。歴史的保存地区として43ブロックを指定し、保存計画を作成。（3）2003年から北京旧市街地に現存する四合院を調査し、658カ所の保存地区を決定している。また最近では近代建築の保全も視野に入れていることなど。

続いて天津市都市計画設計研究院の秦副院長から、天津市の「歴史文化名城保護規制」について説明があった。天津の都市形成の始まりは7世紀からで、「天津」という名が登場するのは1404年、明の時代に軍事要衝として城壁を築造したことに始まる。海河を中心に両岸に市街地が拡大。1858年の第二次アヘン戦争を経て天津港が海外に開放され、8カ国が租界を置いた。このころの建造物が1000棟あまりも残存し、「万国建築博物館」ともいわれている。都市整備の全体構想がなかったため、天津の道路網はそれぞれの租界ごとに形成され、そのまま都市の骨格になっている。

現在、伝統文化商貿区、中心商業区、中心商務区の3つに分け、整備を進めている。特に歴史的建造物が残っている歴史的文化保護区の総面積は750万m²。保存状態のいい700棟の歴史的建造物があるエリアでは、高さ制限をしつつ建築密度を上げて、サービス業が経済的にも成り立つよう、スペインやイタリアの都市計画や経済の専門家などを招いてスタディしている、とのこと。

日本側からは、宮原義昭理事が「日本における再開発事業の実施状況と今後の課題」と題し、日本の1割以上の都市で再開発が行われている実態や、事業内容の変遷、少子高齢化に合わせたコンパクトシティを標榜する新しい方向性などを紹介した。また河野擴国際委員長からは「日本の再開発制度とその変遷」と題し、1969年の都市再開発法制定までの流れ、補助制度や権利変換など日本独自の再開発事業の基本的な仕組みなどが紹介された。

最後に任副会長が「理論から実践までさまざまな参考事例があり、今回の交流の目的は達成したと思う。再開発についてのこのような会を今後も重ねていきたい」と締めくくった。

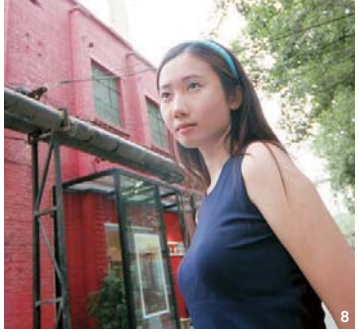
話題のオリンピック会場を見学

北京市都市計画設計院をあとにし、オリンピックメインスタジアムの近くにある「北京市2008プロジェクト展示センター」でスポーツ施設群の300分の1模型を見学した。その後「北京市都市計画展覧館」へ。面積が302m²ある北京市の750分の1模型は圧巻。3Dホールでは、2008年までに完成するCBD（中央ビジネス区）が3D映像で映し出され、近未来型の都市が出現することを予告していた。参加者の一人は「北京の住生活はすでに先進国の水準に到達しているが、一方で格差が拡大している状況もうかがえる。今後の政府の手腕が問われるだろう」と視察の感想を語った。

「21世紀は東アジアを中心に世界が動く」と2005年の交流会議で語った伊藤滋会長は「日本は、21世紀の経済発展では中国、韓国、台湾に劣ることになるかもしれない。では世界のなかで日本の存在を何で主張できるかというと、それは日本の文化。“清潔”にすることが好きな日本人の特色を生かして、美しいまちづくりを進めていくべきだ」と、このときの基調講演を結んだ。

めざましい変化を遂げるアジアのなかで一歩先んじたはずの日本のまちづくりも、いま同じように問われることになる。 NE

＊社団法人再開発コーディネーター協会についてはホームページを参照　http://urca.or.jp/



北京点描

1. 天安門広場や人民大会堂がある歴史地区に建設中の「国家大劇院」。設計はフランスの建築家ポール・アンドリュー。あまりに未来的なデザインや水を多用するアイデアが、水不足の北京にふさわしいか物議をかもしている。屋根材には日本製のチタン複合材が使われている2.「SOHO現代城」の緑豊かな中庭で遊ぶ子どもたち。彼らの両親はほとんどが共働き。農村出身のベビーシッターが子どもたちの面倒を見ている3.3つの放物線が連なるようなデザインの西直門駅は、中国で活躍しているフランスの設計事務所「AREP」による設計。こうした曲線とガラスの建築が目立つ4・7.第3環状道路の南東にある「潘家園旧貨幣市場」。陶器や書画の骨董品から民族衣装や石のアクセサリーなど、一日いても見きれないほどの商品がならんでいる5.故宮近くにある北京飯店屋上からの眺め6.西太后の生家をレストランとして公開している「桂公府」8.798芸術区にいた女子大生は日本企業に就職予定とか9.2006年4月にオープンしたばかりの建築・デザイン専門ギャラリー「47Art & Architecture」。設計は中国の若手建築家・王暉10.中央ビジネス区の建設中のフェンスにはSOHO中国の社長・潘石屹氏が大きく描き出されていた11.外国人観光客がぐんと増えている胡同地区12.鼓楼と鐘楼をつなぐ駐車場で客を待っている胡同巡りの輪タク

（写真3.10.11.12.は編集部）

ノスタルジーで人々に安らぎを与える町

先人から受け継いだ財産で癒しのまちづくり

写真……石井雅義

「昭和のまちづくり」で話題の青梅駅前商店街。手描きの映画看板などを復活させ、昭和の雰囲気を漂わせている

東京都内にありながら豊かな自然を有し、都内の気軽なアウトドアスポットとしての顔を持つ青梅市。昭和20年代には織物産業が全盛となり、まちは大きく発展していく。

しかし次第に織物が衰退していくと、それに伴いまちも活気を失っていった。

そんな状況から脱しようと、今から約20年前に駅前商店街が動き始め、開催されたのが「青梅宿アートフェスティバル」。そこから生まれた「昭和」をキーワードに次々とアイデアを展開していき、いつしかまち全体を博物館に見立てたユニークな構想へと発展していった。

[左]自然が美しい多摩川上流の御岳(みたけ)渓谷。川沿いには遊歩道があり、川では釣りやカヌーが楽しめる。また、多くの芸術家に親しまれた地としても有名だ

自然と歴史的遺産を生かした新たな試み

青梅市は、都心から西へ50km、JR東京駅から青梅駅まで約70分という距離にありながら、秩父多摩甲斐国立公園の玄関口に位置し、御岳山や御岳渓谷、吉野梅郷など自然に恵まれた地として知られている。休日には多くの人が訪れる都内屈指のアウトドアスポット。そんなイメージの青梅市だが、以前は産業のまちとして栄えていた。遡ること江戸時代。石灰、木材、織物の産業が盛んになり、さらにそれらを江戸市場へ運搬するため多摩川の水運や青梅街道が整備され、一帯が発展していく。その繁栄は昭和30年代まで続き、市内には民家や商家、石積み、トンネルなど、それぞれの時代の面影をしのばせる建造物やまち並みが今でも数多く残っている。

豊かな自然、歴史的建造物や土木遺産。生活様式の変化や利便性を求めるなかで、これらの景観は消えつつある。貴重な歴史的財産を守ろうと、青梅市では平成16年10月に「青梅市景観まちづくり基本方針」を定めた。身の回りの景観を絵画的な眺めとしてとらえるだけではなく、実際に人々が活動する「くらしの舞台」として、五感を通して優れたもの、快適な空間となるように、青梅市ならではの自然や先人から受け継いできた歴史、文化を現在、さらには未来へと引き継いでいこうという試みだ。

基本方針は、平成13年から15年にかけて東京大学の篠原修教授を会長とする青梅市まちづくり懇談会において市民の意見を取り入れながら、まとめていった。

まず、目標となる大きな柱が「山なみと清流が織りなす自然環境を守り育む」「固有の歴史・文化を受け継ぐ」「活き活きとした暮らしの舞台を整える」の3つ。また、特に重要な景観形成の要所となる地域のひとつとして、青梅駅周辺を景観形成重点検討地区と位置づけ、まちづくり座談会やシンポジウムを開催。市民の意見や提案を踏まえ、平成17年6月に「青梅駅周辺地区景観形成基本計画」をまとめた。対象地域は青梅駅を中心に、東は勝沼から西は日向和田までの約423ha。特に歴史・文化・産業の中心地として発達し、青梅宿のまちなみを伝える西分町から森下町の青梅街道沿い周辺を「青梅駅周辺景観形成地区」として検討している。

1 吉川英治記念館。『宮本武蔵』などでおなじみの文豪・吉川英治の旧邸 2 3 大正時代に建てられた蔵を改修したダイニング&ギャラリー「繭蔵」。野菜を中心とした食事で女性に人気。昼どきには満席になる

「時代背景はバラバラですが、その地域には築50年以上たった価値のある建物が残っており、店蔵や町屋建築は約40軒にものぼります。駅前街道と裏路地を使って回遊性のあるまちづくりをしていき、青梅を訪れる人にまち並みを見てもらいたい。そして住んでいる市民にも誇りを持ってもらえればと思っています」と、青梅市都市開発部都市計画課景観担当主査の奥富哲夫さんは語る。今後は「青梅市の美しい景観を育む条例」による「青青梅駅周辺景観形成地区・景観形成計画・景観形成基準」を決定し、積極的に景観整備・修景を進める予定だ。

外へ向けてさらなる青梅の魅力を発信

平成17年には東京都から「観光まちづくり地域サポートプログラム」事業の対象地域に指定された。観光のまちづくりを目指す都では、観光地はひとつの区市町村だけにおさまるものではないとし、これまで各自治体が単独で行っていた観光対策を近接する自治体と広域地域で行い観光地としての魅力を高めていこうと、この事業を立ち上げた。そして、いくつかの候補地域のなかから選ばれたのが「青梅市、奥多摩町」と「台東区浅草地区、墨田区両国地区」であった。

「青梅市、奥多摩町はJRの乗降者数で見ると、この10年くらいでかなり減ってきています。この地域には御岳山や岩蔵温泉、美術館も多くあり、これらの観光資源を情報発信すると同時に、受け入れ側の体制を整え、観光客を増加に転じさせていこうと考えています」と東京都産業労働局観光部振興課観光まちづくり担当課長の柴田修一さん。

まず広域地域に対応するために商工会議所などを入れて青梅・奥多摩地域観光まちづくり協議会を発足。昨年1年間かけて調査書を作成し、これを基に平成18年5月26日には観光ビジョンをつくるための検討委員会が活動し始めた。検討委員会には各観光協会、青梅商工会議所、東京都森林組合、ぶらり青梅宿実行委員会などのほか、JR東日本、西東京バスなどの交通機関も参加。景観や観光、特産品などにかかわる6つの検討委員会に分かれ、今後のビジョンを練っている。具体的には、登山道や遊歩道の整備、多摩川・温泉・美術館・陶芸・ギャラリー等を巡る歩き道と道標設置、マップづくりなどを実施していく予定だ。

4 青梅宿のあった青梅駅周辺には江戸～昭和、歴史ある建物が数多く残っている。十三代続く柳屋米店の母屋は明治時代のもの 5 織物工業組合旧試験場 6 瀧島家住宅。2階部分に2つ窓がある、めずらしい造り

さらには、青梅の商店街による「昭和のまちづくり」で映画看板が話題になったことにちなんで映画関連も誘致できないかと検討している。

「都で支援するのは平成20年度まで。その後は、立ち上げた組織に活動を任せていきます。それまでにきちんとした組織づくりと人づくりをすることが役目となります」と柴田さん。

青梅市では、平成13年に212万人だった観光客を5～10%増やしていきたいと考えている。

「そのためには今のスタイルに合わせた観光モデルが必要です。これまでは、3月は吉野梅郷、ツツジの季節には塩船観音、レンゲショウマが咲く8月は御岳山とスポット的な観光でしたが、各地域の観光協会とコミュニケーションを取り、これからは連携したルートで紹介していく方向でまとまりました。地域サポートプログラム事業に指定されたことで、話し合いの場が設けられ、青梅全体の認識改革につながりました」と話すのは青梅市役所環境経済部商工観光課課長の水村和朗さん。また、商業についても地域型から観光型への移行が重要になってくるという。青梅市でも、平成19年にショッピングセンターが出店する予定だ。これに対し地元商店は外からの集客に目を向け、地域ぐるみで青梅ならではの店づくりをしていこうとしている。

「青梅のまちなかを散策しながら、ショッピングや食事も楽しめる観光スタイルにすることで、地域商店が活性化できると考えています。かつては木材や織物などの産業が栄え青梅宿ができ、その町屋が今なお残っている。昭和の映画看板がある駅前の住江町商店街も話題です。青梅の自然に惹かれて吉川英治や川合玉堂、山口瞳らがこの地を訪れ、文化人とも縁が深い。レトロで落ち着いた、いろいろな意味でアートが感じられるところです」と水村さん。これらの観光資源を生かし、魅力あるまちづくりをスタートさせた青梅市。今は発展途上だが、その取り組み内容の充実ぶりから、数年後のまち並みがどう変化しているか楽しみだ。

懐かしの昭和。キーワードは「ノスタルジー」

青梅駅に降り改札へ向かうと、地下道の両側になぜか手描きの名作映画看板が飾られている。そして、駅前の住江町商店街へと進んでいくと、街道沿いのあちこちに同様な映画看板が掲げられ、レトロチックな店舗や電話ボックス、街灯などが点在し、昭和時代にタイムスリップしたような不思議な雰囲気を醸し出している。この独特なまちづくりを仕掛け、今も中心となって活動しているのが横川秀利さんだ。この住江町商店街にある「青梅赤塚不二夫会館」「昭和レトロ商品博物館」「昭和幻燈館」の館長を務めている。

「きっかけは、都のモデル商店街事業を受けたことです。ハード事業として平成元年に歩道整備を、ソフト事業では平成3年に『街はみどりの美術館』というイベントを行いました。大型店には真似できないことをして客を呼び込もうと、地元のアーティストの作品を飾って、買い物だけでなくアートも楽しんでもらおうという主旨。これが今も続いている『青梅宿アートフェスティ

1 住江町商店街にある「昭和レトロ商品博物館」。空き店舗対策事業の一環 2 昭和のまちづくりの発起人、横川秀利さん 3 昭和レトロ商品博物館内。昭和の風景が再現され、懐かしの生活雑貨を見ることができる 4 5 JR青梅駅も平成17年3月からレトロステーション化を進めている。写真は地下道の映画看板と待合室 6 東京都モデル商店街事業で設置された電話ボックス 7 昭和最後の現役映画看板絵師、久保板観さん 8 「昭和幻燈館」では昭和をイメージしたジオラマを展示

バル』の最初です。商店街の多くが大正から昭和初期にかけて創業していたので、第3回は大正ロマンが色濃く残る昭和モダンスタイルでいこうということになり、画家の竹久夢二を取り上げました」

そのときに夢二の美人画を模して描いたのが地元看板店の久保板観さん。久保さんが、昭和の映画全盛期に看板絵師として活躍していたことがわかると、当時の映画看板を復活させてもらい、翌年の青梅宿アートフェスティバルで飾った。これが好評で商店街に常設することに。そして毎年11月に開かれる青梅宿アートフェスティバルも「妖怪」「花嫁御寮」「招き猫」「写真家荒木経惟」などのユニークな企画で話題になっていき、多くの人が訪れるようになった。

横川さんが次に取り組んだのが空き店舗対策事業だ。住江町商店街ではいくつかの店がシャッターを下ろし歯抜け状態になっていた。そこで平成11年に空き店舗となっていた家具屋を昭和レトロ商品博物館としてオープンさせた。駄菓子屋を再現したり、今は見かけなくなった懐かしい商品を展示した館内は昭和の面影を残し、幼少時代を思い起こさせる。映画看板の効果もあって観光目的で市外から来る人も増え、手応えを感じた横川さんは、平成15年、その隣に青梅赤塚不二夫会館を開く。

「なぜ赤塚不二夫かというと、昭和を代表する漫画家だったから。赤塚さんに連絡したらビックリしてたな。彼も元は映画看板屋に勤めていて、テレビでこの商店街の様子を見たら懐かしがって、自分の漫画が役に立つならって喜んで承諾してくれました」と横川さん。その後、昭和の心象風景をテーマにしたジオラマを展示する昭和幻燈館もでき、割安な3館めぐり共通券を発行。相乗効果で、開館当初はレトロ博物館の入館者数が9000人だったのが現在、約3万人にまで増えている。

「昭和の雰囲気は年配者には懐かしいし、若者には新鮮に映る。だから幅広い層に受けているのでは。『ノスタルジー』って現代を救うキーワードなんじゃないかな。東京の奥座敷、癒しのまちになりたいですね。究極は、観光地だけど京都や鎌倉のような風情のあるまち、住んでみたいまちナンバーワンを目指したい。まちをよくしていくには都・市・商店街の三位一体、コンセプト、縁の3つが大切。商店だけではもたないが、都、市がそれぞれ3分の1の補助金を出し、残りの3分の1を商店で負担すれば資金繰りもうまくいく。黙っていないでコンセプトを出せば外から助けがくる。あとは人の縁です」と横川さんは話す。

9 まちのイメージに合わせた木製のバス待合所 10 バカボンのパパが目印の「青梅赤塚不二夫会館」。建物は元外科医院を再利用した

そして今では「ぶらり青梅宿実行委員会」を組織し、住江町だけでなく周辺の商店街も巻き込み「おうめまるごと博物館」構想を進めている。旧青梅街道沿いを町屋まるごと博物館、昭和まるごと博物館、匠まるごと博物館の3区画に分け、買い物も食事もできて一日楽しめる観光商店街にしようというもの。これらの活動が認められ、今年6月には経済産業省による「がんばる商店街77選」に選ばれた。また、東京都の観光まちづくり地域推進事業のなかで横川さんは、御岳山の登山道整備とスギ花粉対策で伐採する木材を使い、看板でまちを活性化できないかと考えている。

「プラスチックの看板って味気ないじゃない。商人にとって看板は大切なもの。老舗の昔ながらの看板ってすばらしいものが多い。駐車場でも案内板でも木製の看板を掲げたら素敵になるよ」。横川さんの商店街に対する思いはとどまるところを知らない。

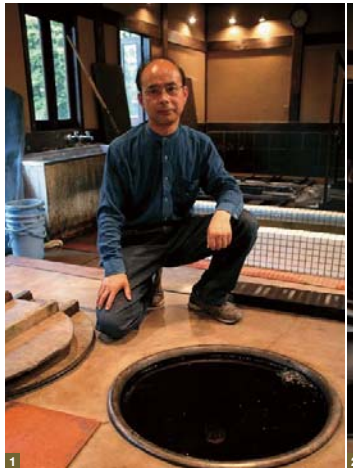
熟練した職人技が生きている映画看板

今では青梅のまちを語るうえではずせない映画看板。描いている久保板観さんは、16歳だった昭和32年から描き始め、今なお活躍する昭和最後の映画看板絵師だ。

「子どものころは貧乏で映画なんて観られない。映画館の周りの雰囲気が大好きでスチール写真や看板を見るのが楽しみだった」と久保さん。看板絵師になったきっかけは中学生のころ、大河内傳次郎主演『丹下左膳』のスチール写真が目に留まったこと。

「なんてかっこいいんだ！と、取り憑かれたように見てましたね。そのうち俳優の顔が頭から離れなくなって、よし描いてやるぞって。それからは学校でも映画スターの顔ばかり思い浮かんで、うまくなるよう毎日練習しました。それが高じて、映画看板の素材やら描き方をいろいろ調べて独学したんです。中学を卒業すると近所の映画館に看板を描かせてほしいと頼んだけど、普通は3年から5年くらい奉公するもんだったから断られてしまったんですよ。そこで福生の看板屋に弟子入りして。でも、なかなか映画看板を描かせてもらえないもんだから、半年後には辞めて青梅へ戻って、今度は材料費だけでいいからって、地元の映画館に直接、何度か交渉したら長谷川一夫の『銭形平次』を任せてくれました」

その後は青梅市にあった3館全部から映画看板を頼まれるようになり、多忙な毎日を送る。それでも収入は材料費のみ。腕も上がったことだし、値上げをしてもらおうと考えていた昭和48年、市内の映画館がすべて閉館してしまった。そこで、映画看板で培った腕を生かし、今度は文字で売ろうと商業看板へ方向転換する。収入もよくなり順調に思えたが、平成になると商業看板も次第にコンピュータ化され、手描きの仕事は減る一方。



1 江戸時代に一世を風靡した青梅嶋を復活させた村田博さん。当時「しま」には縞ではなく嶋の字が充てられていた 2 壺草苑（こそうえん）で働く二十代の職人。両手が藍で染まっている。工房では見学や藍染め体験も実施している 3 今年から製品化された青梅嶋の反物。綿は藍、絹は茜やヤマモモなどの草木で染めている

4 川沿いの傾斜地にある住宅街には「ついじ」と呼ばれる石垣が残っている 5 6 釜の淵公園。青梅駅から徒歩で約20分のまちなかにありながら、多摩川に囲まれた丘陵で散策や釣りなどが楽しめる

「50歳くらいのときに今度は何をしようかと、目を付けたのがアコーディオンだった。10年くらいすればものになるだろうし、老人ホームを回って小遣い稼ぎでもしよう、そんな気持ちでプロについて習い始めて2年ほどたったころ、青梅宿アートフェスティバルで一曲弾いてくれと声を掛けられた。そのときに、あまり予算がないので文字看板も描いてくれと頼まれて。文字と一緒に竹久夢二の模写を描いたら好評で、自分は絵師だったから映画看板を復活させたらということになったんです。どうせなら本物を飾りたいと思って、昭和30年代のカラーを出すために泥絵の具を使いました」

泥絵の具は赤・青・黄・白・黒の5色をゼラチンの一種である「にかわ」で溶かし混ぜて使う。夏は腐りやすく、冬はすぐに固まってしまい、塗り直しも利かないなど扱いにくいが、マットな仕上がりで遠くからでもハッキリとした色合いが出る。そうやって当時の手法で描かれた懐かしの名作映画看板は、翌年の青梅宿アートフェスティバルで話題になり、テレビでも紹介された。その後、青梅駅周辺に30枚ほどが掲げられるようになった。看板は『ティファニーで朝食を』『キッド』『用心棒』など、洋画、邦画を問わず誰もが知っていそうな名作を取り上げる。それらは毎年少しずつ入れ替えるため、この十数年で描き上げた看板は400枚以上にのぼる。

「クリア塗装しているからもつけど、本来は1週間程度で使い捨てるもんだから。それに上映される映画が変わるから人が来るように、看板が変わるから青梅のまちにも人が来てくれるんだと思います。これからは小学生や中学生に教えたりして、若い人にこの技を伝えていきたいですね」

2年前、23歳の女性がアシスタントとして弟子入りし、下書きまで任せられるようになった。駅前商店街には、赤塚不二夫会館の若手スタッフが描いたネコの看板も点在していて、まちの雰囲気づくりに一役買っている。横川さんや久保さんが育てた駅前商店街を、共感する若い人たちが少しずつ受け継いでいた。

江戸時代のおしゃれ着、青梅嶋を復活

「江戸時代、日本で最高のおしゃれ着といえば青梅嶋だったんです。おしゃれ好きで有名だったねずみ小僧が捕まって引き回されたときには、紅をつけ青梅嶋を着ていたともいわれているんですよ」と話すのは藍染工房・壺草苑（こそうえん）の苑長、村田博さん。江戸時代から約200年続き、明治時代に途絶えてしまった青梅嶋を復活させた。青梅嶋は縦糸に絹と綿を、緯糸に綿を使い、藍などで染めた縦縞模様の染着物地。江戸時代後期の奢侈（しゃし）禁止令によって人々は贅沢を禁じられ、絹を身につけることも許されなかったが、表向きは綿製品として扱われた青梅嶋はその当時も自由に扱うことができた。絹ならではの風合いがあり、小粋な縦縞が歌舞伎役者などに好まれ、次第に江戸中に流行していった。しかし、明治時代に入ると合成藍が流通し、青梅嶋を真似た粗悪品が出回って青梅嶋の生産量は激減。明治中ごろには、ついに途絶えてしまう。

村田さんは青梅で染め物を営む会社の三代目。20年ほど前、都立繊維試験場を見学したときに、青梅嶋の布の切れ端に出会った。興味を持った村田さんは、その歴史を調べていくうちに青梅嶋の魅力にはまり、ついに自分で復活させるまでになった。

「染めも織りも当時と同じ手法にこだわりました。もともと染色が専門なものですから、染めについては問題はなかった。藍には灰汁（あく）、酒、ふすまを入れて、絹はヤマモモや青梅にちなんで梅の木などで染めました。問題は織りです。今の機織りはステンレスの筬（おさ）を使っているんですが、昔を真似て竹の筬で手織りしました。綿は打ち込めば打ち込むほど、目が詰まっていく性質があります。熟練者じゃないと、なかなかうまく織れません。大変な手間がかかりますが、糸同士の弾力性が生き、手織りならではの風合いが出ます」。素材についても、手紡ぎの綿糸が手に入らないとインドから輸入した。そうして20年という長い年月をかけて江戸時代の青梅嶋を忠実に再現させた。

「青梅嶋はすばらしい。復元したことで染めや織りがどんなに優れていたものかを確信しました」と村田さんは語る。

その後は、商品として扱えるようにするため、また試行錯誤の繰り返し。織りこそ機械織りだがオリジナルの風合いに限りなく近く仕上げ、天然藍、天然染料を使って江戸時代からの伝統技法で染め上げて、今年から製品化した。反物を青梅市内の呉服店で販売しているほか、壺草苑で直接購入できる。生地の質感からすると秋冬向け。14種類の縞模様を扱っている。

「問屋を通さず、少しでも安く販売するように心がけています。より多くの方に手にしていただきたい。今後は青梅嶋の洋服なども展開していきたいですね」と村田さん。すでにアトリエには、元有名ブランドのデザイナーによる試作品が数点置かれていた。試着させてもらったジャケットは軽くてしなやか。細い縞がシックな印象で、言われなければ着物地ということに気づかないくらいだ。現在、壺草苑では5人の職人が働いている。藍は徳島に5人いる無形文化財の職人が手がけたものを仕入れており、年間生産される1000俵のうちの45俵を使っているという。その藍に石灰などを加えた液を25度に保ち、2週間発酵させると染められる状態になる。生地は染まり具合を見ながら納得いく色になるまで何回かに分けて染めていき、そして色落ちしないよう何度も水洗いする。これらはすべて職人による手作業だ。

素材へのこだわり、技へのこだわり、そして地元へのこだわり。村田さんの追究していく精神が優れたものを生み出し、受け入れられている。決して大げさではなく、むしろその静かな語り口から、青梅ならではの伝統の確かさを感じとることができる。

地元の自然や歴史、伝統のよさに気づき、それを守り現代の暮らしに蘇らせようと動きだした青梅の人々。その雰囲気を体感したくて訪ねてみたくなる、そんな独創性を持った豊かなまちへと、青梅市は変貌を遂げようとしている。 NE

市長インタビュー

暮らしに根付いた美しい風景都市をつくるために

青梅市 竹内俊夫 市長

自然、歴史、文化に恵まれた魅力のまち

青梅市は都心から40～50km離れ、秩父多摩甲斐国立公園の東の玄関口として自然に恵まれた土地でもあります。ほかにも金剛寺には青梅の地名の由来ともいわれる都の天然記念物の梅があり、これにまつわる「平将門伝説」が残っているなど多くの文化財に恵まれています。小説家の吉川英治が活躍し、日本画の巨匠・川合玉堂や工芸作家・藤本能道らがついの住みかとした地でもあり、自然、歴史、文化がそろった魅力ある場所です。さらに、商業のまちでもあり、古く江戸城には青梅で採取した石灰石が使われ、昭和20年代には「青梅夜具地」という布団生地の織物が全盛期を迎えます。その名残から「昭和レトロ」につながってきています。青梅には、いいものがたくさんある。それに気づき生かそうと動きだしたところです。

まずは市民に地元のよさを再確認してもらう

どの地域でもそうですが、そのなかにいると当たり前すぎて、そのよさに気がつかないことが多い。これだけ豊かな自然があるのだから、市民にもっと触れてほしいですね。町屋についてもそうです。まちづくりに協力してもらうため景観審議会に招いた専門家から、青梅にはいい建物が残っていると言われました。地元の方々に説明会を開いたところ、それならばと地元主体で調査しようと動き始めた。そして専門家に調べてもらうことで、自分たちの住んでいる所が価値あるものだとわかったのです。都心を真似たようなものを新たにつくるのではなく、そこにあるもののよさを再確認して生かし、市民が楽しく暮らせる空間をつくる。そうすることで、外部から人々が寄ってくるのだと思います。

健康都市を目指して

私自身、走るのが好きで、よく永山丘陵ハイキングコースを走ります。最近では、御岳、日の出から吉野梅郷まで足を延ばし、1日がかりで散策を楽しむ観光客も多くなりました。青梅は歩くことで、そのすばらしさがわかるところ。目指すは「健康都市」です。市ではもっと多くの人に歩いてもらうため、ウォーキングマップづくりなども行っています。そしてゆくゆくは市民のボランティアガイドを養成し、青梅を訪れた方々を案内してほしいと考えています。また、市内の小中学校でも、もっと自然に触れあえるようなプログラムを設け、子どもたちに青梅に触れてもらいたい。市民に自らのまちのよいところを認識し誇りを持ってもらうため、やるべきことはまだまだいっぱいあります。

●プロフィール●
元建設省（現国土交通省）職員。マラソン好きのスポーツマン。毎年、青梅マラソンに参加することはもちろん、日々市内を散策し、青梅の自然の豊かさ、まちのすばらしさを実感。1999年に青梅市長に就任し2期目を務める。青梅市の特徴を生かした市民にとって暮らしやすいまちづくりを進行中。62歳。

川岸の草花が生長し、緑豊かな川に復元された清渓川（2006年5月）

シリーズ　自然浴環境　—6—

ソウルの都心によみがえった清流

清渓川（チョンゲチョン）

飛び石を渡る子どもたち

ソウル市の中心部を東西に流れる清渓川は、1950年代にコンクリートで覆われてから約半世紀の間、交通量の多い幹線道路として機能していた。しかし経年劣化による安全性の問題が指摘され、これを機会に大規模な親水空間への転換が試みられた。着工から約2年、2005年10月に、念願の市民が親しめる川が復元された。（本誌5号、同シリーズ4の続報）

完成した清渓川：
大気・熱環境モニタリングプロジェクトのこれまで

文……一ノ瀬俊明（独立行政法人国立環境研究所 主任研究員）
写真……編集部

写真-1　復元された清渓川に繰り出したソウル市民（2005年10月1日）（提供：一ノ瀬俊明）

よみがえった清渓川

2005年10月のはじめ、ソウル市民は歓喜の渦につつまれた。2003年7月に始まった清渓川（チョンゲチョン）復元工事がとうとう完成し、市民に開放されたのだ（**写真-1**）。復元工事完成記念行事では、数日にわたって歌あり踊りありのさまざまな催しが繰り広げられた。

2003年7月1日に着工、2カ月で高架部分を撤去し、2005年10月1日に完成式というハイスピードでの施工は韓国ならではのものである（**写真-2～4**）。総工費3870億ウォン（約420億円）のうち、70%が壊すための費用であり、30%が緑化など復元の費用であったという。

復元された河川は深さ40cm程度であり、自然の川というよりは、一般の人がビオトープという言葉を聞いて連想するような人工の川そのものである。しかも地上からは5mもの深さにあり、転落防止のため、地表とは高さ1.2mのフェンスで区切られている。環境アセスメントに参画した島津康雄・名古屋大学名誉教授は失望を込めて、これを「隔離された親水空間」と呼ぶ。かつての石橋を復元したものなど、約300m間隔で22カ所の橋が設けられている。水源は当初下水処理場の高度処理水を利用する計画であったが、水生生物の生活環境を考え、最終的には漢江の原水を利用している。

ソウル市はこの事業をあくまで都市再開発と位置づけており、沿線では超高層マンションの建設も進んでいる。従前、高架道路がなくなることによる周辺道路の渋滞深刻化が懸念されたものの、交通渋滞の主要原因はこの地域を横切って漢江の橋に向かう南北交通であり、幸いにも、今日この事業が大きな渋滞問題を招いたとの結論には至っていない。ソウル市の李龍太（リ リョンテ）部長（現在国立環境研究所共同研究員として日本に滞在中）によれば、かつて高架道路（対面4車線前後）には1日12万台、下部の一般道路には1日6万台（片側4車線ずつ）が走行していた。これが現在では2万台（片側2車線ずつ）に減少した。清渓川復元事業は、自然空間の復元という視点では成功とはいいがたいものであったが、膨大な大気汚染負荷と人工排熱源がなくなり、水面と緑地に置き換わったという意味では、大気・熱環境改善の効果は小さくないはずである。

この事業を推進した李明博（イ ミョンバク）市長は元「現代（ヒョンダイ）」社長である。高架道路を造ったのは「現代」であるから、「造って儲け、壊して儲けた」の声もあるという。

生活の糧を奪われるとして復元事業に反対していた多くの露天商たちは、着工後3カ月ほど小屋を造り鉢巻をして座り込んでいたものの、結局、東大門近くの元野球場に移転し暫定営業することで落着したという。

復元の進捗状況

大気・熱環境モニタリングプロジェクトメンバーによる撮影（提供：一ノ瀬俊明）

写真-2　2003年6月

写真-3　2004年7月

写真-4　2005年8月

日曜にもかかわらず、たくさんの子どものグループが繰り出していた

ビジネス街に位置する最上流部はソリッドなデザインになっていて、滝の音が涼やかに響く

清渓川復元による大気・熱環境の変化

一般に都市内を流れる河川は、周辺の都市構造物にくらべて表面温度が低く、かつ粗度が小さいことから、河川が気温分布や風通しに影響を及ぼしているものと考えられる。例えば菅・河原（1993）*1が観測した多摩川での結果によれば、日中の河道内低水路部の気温は周辺市街地にくらべて1.2～0.8℃低く、高水敷でも0.8～0.4℃低い。武若ら（1993）*2は観測により、河川の冷却効果の影響範囲は周辺150m程度であろうとしている。村川ら（1990）*3は、河川水面の幅が広いほど河川の冷却効果が大きく、河川と直交する街路幅、および河川周辺の建物密集度にも影響され、さらに風向・風速によっても左右されることを明らかにしている。こうした冷却効果は日中に顕著である（例えば、武若ら、1993）。

筆者らは、都心の大規模河川空間復元がもたらす暑熱現象緩和効果の定量化を目的として、この復元工事施工初年度（2003年）から最終年度（2005年）に至る8月中旬に、復元河道近傍および河道より100m以内の数地点における暑熱環境の総合的なモニタリングを進めてきた（一ノ瀬、2006）。施工中期（高架道路はすべて撤去され、河道が掘削されて土壌が露出している状態）の2004年は比較的高温、施工最終年度（河道の復元が完了し、わずかに水が流れる状態）の2005年は比較的低温の条件となった。

暑熱が問題となる典型日と考えられる日のデータを比較した結果、2003年に対し2004年はバックグラウンドデータとしての気象庁（江南）における気温が、着目時間帯（11～14時）で5～7℃高温であったのに対し、河道周辺3地点では3～4℃高温、河道より100m以内における体感温熱指標（SET*）はほぼ同じレベルの値になっていた。しかし2005年は一転して涼しい夏となったものの、湿度が高かったためSET*は微増という結果になり、この3年間だけのデータでは復元による暑熱現象緩和効果の確認に至らなかった。このことからも、2006年以降に2004年のような高温条件が出現した場合の観測が必要である。

一方、超音波風速計による風の移動観測により、河道に直交する街路には南北両方へ吹き出す事例も確認されたことから、復元河道の「風の道」としての効果を検証したほうがよいと思われる。復元河道からやや離れたところにまで暑熱の緩和効果がもたらされるとすれば、この風の存在が不可欠と考えられ、今後の観測においてはこれを重視したいと思っている。

大気の質に関しては、近傍の住民から「ほこりがずいぶん減ったのを実感している」との声を数多く聞かされたが、ソウル市政府が復元河道近傍（清渓4街）で2001年より常時観測している大気汚染物質濃度（PMやCOなど）には、復元工事による顕著な影響は確認できなかった。工事期間中新たに生じた慢性的な渋滞や、工事により表土が露出した期間が継続したことなども影響したのではないかと思われる。さらに今後の変化が注目されるところだ。

河川自体の復元事業はこれで終了であるが、今後は魅力的な商業用地として価値の高まった河道周辺地域の再開発が順調に進んでいくものと思われる。その影響がどう出るかも気になるので、このような大気・熱環境のモニタリングは今後も地道に継続していくことが必要である。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B「都市内大規模河川（ソウル市清渓川）の復元による暑熱現象改善効果の実証」（代表・一ノ瀬俊明）として現在も進行中である。

●参考文献

*1菅 和利，河原能久：都市河川・運河が周辺市街地の熱環境に及ぼす効果，水工学論文集，37，195-200頁（1993）

*2武若 聡，池田駿介，平山孝浩，萱場祐一，財津智亮：都市内河川による大気冷却効果―都市内河川内外の夏期の熱環境および気象観測―，土木学会論文集，479(II-25)，11-20頁（1993）

*3村川三郎，関根毅，成田健一，西名大作，千田勝也：都市内河川が周辺の温熱環境に及ぼす効果に関する研究（続報），日本建築学会計画系論文報告集，415，9-19頁（1990）

一ノ瀬俊明：都市内大規模河川（ソウル市清渓川）の復元による大気環境改善，日本地理学会学術大会発表要旨集，69，132頁（2006）

300 m間隔で橋が架けられ、それぞれ違ったデザインになっている

ところどころに飛び石が設けられており、対岸に渡ることができる

上流部のビジネス街には清渓川の歴史と、復元前と後の様子がパネル展示されていた

東大門スタジアム近くに移転した露天商

さりげなく
人にやさしい環境を

プロダクトメッセージ PRODUCT MESSAGE

日々、過ごす空間は
気持ちよいものでありたい。
そして、暮らしのなかでの安全は
当たり前であってほしい。
そんな思いを込めて TOEX は、
自然と風景に溶け込み、
人々に機能的で安心できる商品づくりに
取り組んでいます。

長崎市の名所、眼鏡橋。木のパーゴラが風景になじみ、人々の憩いの場となっています（中島川公園）

✣ **中島川公園**（長崎県長崎市）
［パーゴラ］パーゴラ A タイプ

水辺に映えるステンレスのラインが爽やかな印象を与えます（小浜漁港）

側溝への侵入防止をかねた手すりが、人々をやさしく河原へ導きます（木曽川笠松護岸）

プロダクトメッセージ PRODUCT MESSAGE

住宅街を流れる川に合わせたダークな色遣いが、落ちついた雰囲気を演出します（横浜市阿久和川）

トップレール仕様の柵が、より安全性を高めます（横浜市和泉川）

小浜漁港（福井県小浜市）
[柵] STI-N
[門扉] ステンレスオリジナル門扉

横浜市阿久和川（神奈川県横浜市）
[高欄] DK3 型

木曽川笠松護岸（岐阜県羽島郡）
[手すり] サポートレール 1 型

横浜市和泉川（神奈川県横浜市）
[高欄] DK1 型

病院を訪れた人々にやさしい休息の場。リサイクル材を使用した腰壁は、ベンチの背もたれの役目も果たしています（千葉県済生会習志野病院）

木を模したリサイクル材の階段を上っていくと、日本海を望む憩いの場が現れます（TDK 歴史資料館）

プロダクトメッセージ PRODUCT MESSAGE

そこにいることの心地　よさを演出する

✣ 千葉県済生会習志野病院（千葉県習志野市）
［四阿］TM-21P216（特注、腰壁付）
［ベンチ］TM-71G107（擬石）、C-2 型
［柵］ユニットレール 4 型（ベンチタイプ特注）

✣ TDK 歴史資料館（秋田県にかほ市）
［階段］エコロウッド 2 連木
［テーブルセット］TM-72P037

✣ 藤沢ゴルフ場（神奈川県藤沢市）
［シェルター］アルクヤード AY 型
［高欄］KID（特注）
［ベンチ］ユニットベンチ

ゴムクッション付きのベンチ柵（千葉県済生会習志野病院）

三面囲い付きのシェルターで快適に過ごせる待合スペース（藤沢ゴルフ場）

人々の行動に手を差し伸べる やさしい空間

2006年3月開港の新種子島空港。2段式のバス停屋根をはじめ、快適に利用できるよう、さまざまなタイプのシェルターを設けました
（コスモポート種子島）

コスモポート種子島（鹿児島県熊毛郡）
［シェルター］クレフヤード FXA 型（特注）
［サイン］特注モニュメント

国道 2 号今津 PA 休憩施設（広島県福山市）
［シェルター］クレフヤード FXA 型（特注）

試験場前駅北口広場・南口広場（福岡県久留米市）
［シェルター］フラットヤード FY-2 型、
クレフヤード CXA-2 型（特注、ひさし付）

北口はフラットタイプ、南口はアーチタイプのシェルター。乗降時、雨に濡れないようひさしが付いています（試験場前駅北口広場・南口広場）

身障者用駐車スペースを隈なくカバーする 8m 幅の屋根
（国道 2 号今津 PA 休憩施設）

プロダクトメッセージ PRODUCT MESSAGE

プロダクトメッセージ PRODUCT MESSAGE

風景にプラスする　ことで、引き立つ場の魅力

大阪城へと続く柵には石目調支柱を使用し、趣のある雰囲気を出しています（大阪城公園玉造口）

川辺に広がる公園。柵や手すりが散策する人をさりげなくサポートします（南千住公園）

1300種のバラが咲き誇るバラ園。欧風なイメージを表現したデザイン引戸を設けました（かのやばら園）

大阪城公園玉造口（大阪府大阪市）
[高欄] DK3 型（特注）

かのやばら園（鹿児島県鹿屋市）
[引戸] ジャンボスライド AL 型（特注、鋳物入り）
[手すり] サポートレール 3 型

南千住公園（東京都荒川区）
[高欄] 隅田川統一高欄（特注）
[手すり] ステンレス手すり（特注）

龍華町東公園（大阪府八尾市）
[健康資材] 自然浴さんぽ路 I 型
[手すり] サポートレール 2 型

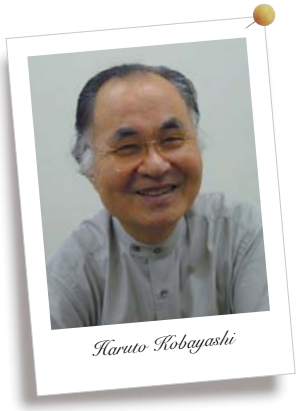
散歩がてら足裏マッサージ。木目調の手すりが風景にやさしい印象を与えます（龍華町東公園）

［シリーズ］

私の景観論 1

「情報デザイン」と「景観」

小林治人（株）東京ランドスケープ研究所代表取締役社長



✣こばやし はると

長野県生まれ。設景家、英国ランドスケープ学会名誉会員。内外の地域・都市ランドスケープ計画に従事。ノルウェーのベルゲンに日本・ノルウェー国交樹立100周年記念庭園を制作中。著書に『「設景」その発想と展開』（マルモ出版、1996年）、『4ランドスケープデザイン』第一巻〜第三巻（理工図書、初版出版1994年）。共著に『ランドスケープ大系3』（社団法人日本造園学会編 技術堂出版、1998年）、『環境都市事典』（丸田頼一編　朝倉書店、2005年）ほか多数。

✣公共空間の無自覚な醜景

世界第二の経済大国といわれる日本に暮らすわれわれの生活環境は、果たして経済大国の名にふさわしいものだろうか？例えば、毎日超満員電車でもまれ、この受け入れがたい屈辱的現状を受け入れざるを得ない多くの人々、これが豊かさの証なのか、と考えてしまう。

もっとも、環境への負荷を考えると、公共交通機関による大量輸送システムは、効率的で省エネに貢献していることになる。しかし、駅はコマーシャル看板に取り囲まれ、電車内は広告の氾濫。これら身近な公的空間の景は、非文化的醜景といわざるを得ない状況が多い。

さらに一例を挙げると、われわれの身近な公的空間に「私」が出すぎている。目立てば売れるということで、看板の氾濫、大声で叫ぶ量販店の客引き、お節介を通り越した案内サービス放送など。さらに公共性の高い交通機関でも、同じ場所に重複しておかれた過剰交通標識、なかでも傑作なのが、高速道路のサービスエリアの標識がある。

基本的に、高速道路はいったん目的地を決めて入路すれば、その方向が東京方面なら東京方面と一方に限定されている。反対方向に行くことはできない、にもかかわらず、駐車場出口には東京方面という案内板がたくさん並んでいる。

さらに、身体障害者用の駐車場所を、地面に車椅子の絵を描いて表示してあるにもかかわらず、大きな看板が重複的に複数置かれる。なんともいえない親切の押し売り、おせっかい現象が美しさを損なっている。

このような現象は、日本の公的空間にはいたるところ存在する。必要不可欠の情報を的確に利用者に伝えることは絶対条件であるが、余計な情報を付加してあまり度を越すと、せっかくの善意が税金の無駄遣いという犯罪になりかねない。無自覚の犯罪、無自覚が生む醜景現象ということになる。

✣情報デザインの必要性

景観構成要素としての資材を販売する側からいえば、商品がたくさん使われることは歓迎であろう。しかし、商品本来の目的機能を十分美しい姿で発揮できるようになっていないと、企業のブランド力を高めるどころか逆のイメージを抱かせることになる。

なぜこのような現象が多いのかを考えたとき、その多くは、情報発信者である管理者に「情報デザイン」の認識が不足していることに起因する。

従来からの習慣的な親切心で、数が多ければよく目立ち、利用者にわかりやすいという、善意によるものと考えられるが、一考を要する。

公的空間における「情報デザイン」は、サイン・標識・看板に代表されるような視覚的に認知される情報と、駅やデパートなどのアナウンスに代表される不可視情報がある。

必要不可欠な基本情報をいかに効率よく伝えるか。過剰を避け、おせっかいにならないようにするためには、情報の価値をしっかり評価し、強調すべきものとそうでないものとの関係をできるかぎり整理して象徴化し、空間化することが情報デザインの基本である。

IT化による情報社会の到来が、情報デザインの重要性を社会的に認識させつつあるが、その変化は早く、これらの問題を管理者が片手間に対応する範疇を超えてきた。

問題解決の早道は、専門のデザイナーに任せることである。現代日本のデザイナーたちは、激しい競争社会のなかで戦いながら、世界的な視野を持ち、デザインの力を発揮することができるようになった。

✣マイナスの志向で真のデザイン力を

これから日本の国土を美しく磨き上げていく専門家としてのデザイナーは、前記したような過剰なものを公的空間からマイナスすることによって日本的な文化性を高めることが可能となることを、もっと社会に認知させる活動をすべきである。

新たにモノを造るとき、情報デザインをしっかり行って、デザインの力によって機能的で美しい景観創造に導かねばならない。そのためには諸施設を新設する前に、醜景をマイナスすることが重要である。

ところが現実は、「今まで気にしなかった騒音や醜景も、人から言われて気がついた。言われてみれば、消費者を馬鹿にしたような過剰サービスだと不快に感じ、我慢できなくなった」などという話になる。

過剰な注意書きや案内看板など、各種の施設を設置する側から見れば、不慮の事故などあったとき責任を問われないようにすることと、経済原理に沿って目立たせれば商品がよく売れて儲かる、という神話を無自覚に信じて実施している。そこには地域全体の環境、文化、ましてや美しい風景などを考えるゆとりがまったく感じられない歴史が長かった。

このような無自覚な行為が引き起こす文化的マイナス要素をマイナスしていくことが、今後重要であると考える。

この考えを実施するにあたっては、「デザインの力」を社会に理解させるために、景観構成要素となる各種の施設デザインレベルを高めること、デザインの力を信じ、デザイナーこそが問題解決に役立つという認識を高めることが必要である。

✣日本の国土運営が問われるとき

公的空間の景観を考えるうえで、ランドスケープアーキテクチュアとシティプランニングの関係も考慮しなくてはならない。

ランドスケープアーキテクチュアは、ニューヨークのセントラルパーク建設時、1860年代に生まれた概念であり、シティプランニングはその後、ワシントンDC建設にあたって1900年代初頭に生まれた概念である。

巨大国家アメリカの顔となる美しい首都建設を目指して、当初ランドスケープアーキテクチュアの概念が基本になってシティプランニングが新たな概念として成長してから、約100年の時間が流れた。そしていま「情報デザイン」が過剰な情報を整理し、環境の世紀におけるIT社会の景観づくりの手法に改革を迫るものとなる。

私は「設景」を用いてランドスケープ・造園の仕事をしているが、過剰な施設などを除去していくことの重要性については以前から考えていた。日本文化の特徴はシンプル、余計なものをそぎ落とす世界である。日本の国土運営の基本的姿勢が問われるときである。

目立てば売れるという神話。しかし、あるレベル以上になると目立つだけでは売れない。目立たせると売れる、効果があると信じ、同じポスターを何枚も同じ場所に張る。このような私的要素が公的空間に突出しすぎる現象、消費者を馬鹿にしたようなくどい看板。「目立てば売れる」から「美しければ売れる」時代に変革するときである。

醜景なものが多い地域・都市・街はイメージが低下し、地域の資産価値を下げることになる。ラブホテルとパチンコ屋ができると周辺の地価が下がるという。逆に、デザインがよく美しい風景の街は豊かになる。

風景の静けさ、安らぎの情景を、無自覚な醜景によって破壊されることを防ぐためには、「情報デザイン」が施された景観構成要素としての商品開発がさらに重要になる時代である。

NE

PROFILE
協力者紹介

大西 隆
おおにし たかし

1948年愛媛県松山市生まれ。東京大学工学部卒業、同大学院修了工学博士。東京大学工学部教授を経て、98年4月から東京大学先端科学技術研究センター・都市環境システム分野／工学系研究科都市工学専攻教授。「逆都市化時代―人口減少期のまちづくり」、「テレコミューティングが都市を変える」等。（社）日本都市計画学会会長、（財）日本地域開発センター理事長、国土審議会委員、産業構造審議会委員など。

呂 斌
ル ビン

1950年中国・大連生まれ。78年天津大学建築学科卒業。85年東京大学工学部都市工学科大学院留学。90年東京大学大学院博士課程修了。工学博士。90～97年まで日本の（株）都市環境研究所主任研究員。97年より北京大学環境学院城市與区域規劃系主任教授。99年より北京大学キャンパス計画委員会副主任。2000年より中国城市規劃学会常務理事。中国地域科学協会常務理事。中国建設省城市規劃専門家委員会メンバー。専攻：都市と地域計画／都市再生とまちづくりデザイン／日本と中国の都市形成比較研究。

原口純子
はらぐち じゅんこ

ライター、コーディネーター。1993年春より北京在住。日本の新聞、雑誌に中国のライフスタイルをテーマに執筆。著書に『北京上海　小さな街物語』（JTBパブリッシング）、『中国の賢いキッチン』（講談社文庫／講談社）、『踊る中国人』（講談社文庫／講談社）など。

シヲバラ タク
しおばら たく

1989年多摩美術大学卒業。フォトジャーナリスト。アンビエント・デザインセンター㈱取締役を経て、現在アンビエント・デザインスタジオ代表。海外の都市計画、環境問題、アート、建築などについての写真と論説。『エスクァイア』『カーサ・ブルータス』『ランドスケープ・デザイン』誌ほかに掲載。92年APAビエンナーレ出品。2005年新風舎より写真集『BERLIN East side-West side Vanishing point』を出版。06年『美術空間散歩』（エスクァイアマガジンジャパン刊）の写真を担当。

一ノ瀬俊明
いちのせ としあき

1963年長野県生まれ。87年東京大学理学部地理学教室卒業。89年同大学院都市工学専攻修士課程修了後、営林署員、東京大学助手等を経て、96年より国立環境研究所地球環境研究センター主任研究員。工学博士。中国上海・華東師範大学資源与環境科学学院地理学系・顧問教授。都市環境、地理学、中国環境問題などが専門。共著に『地球環境と巨大都市』（岩波書店）ほか。ソウルのほか、中国各地のフィールドで研究活動に取り組んでいる。http://www-cger.nies.go.jp/ichinose/

石井雅義
いしい まさよし

1969年千葉県生まれ。92年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。環境コンサルタント勤務後、写真に転向、96年石井アトリエ開設。10年ほど前に、足尾銅山の未だ緑の戻らぬ禿山を目の当たりにし大きな衝撃を受けて以来、その風景の移り変わりを撮り続けている。主な出展歴：96年個展「足尾からの風景」銀座ニコンサロン。98年「足尾銅山緑の再生」アサヒグラフ5月号掲載。2003年写真展、足尾銅山「森のはじまるとき」新宿コニカプラザギャラリーCほか。

［撮影協力］西村 満（ニシムラ・スタジオ）、小澤純一（東甲メゾン）、石原洋一（相互企画印刷）
［ディレクション］高山佳代子、百瀬かほる（フォンテルノ）［アートディレクション＆デザイン］盛田尚弘［校正］山崎しのぶ

TOEX
暮らしをつつむエクステリア
トエックス

設計者のためのビジネスサイト『ネルシスネット』 http://www.nelsis.jp

ホームページのアンケートにお答えいただくとバックナンバーを収納できる『Nelsis』専用バインダーがもれなく当たります。
商品図面の CAD データサービスも行っておりますので、ぜひご活用ください。

本　　社　〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-4-12
東北支店　〒981-3135 宮城県仙台市泉区八乙女中央 1-1-23 TEL.022-776-8562
関東支店　〒168-0073 東京都杉並区下高井戸 5-4-41 TEL.03-3290-8560
長野営業所　〒381-0024 長野県長野市南長池 761-5 ビルド M1F TEL.026-263-0861
静岡営業所　〒422-8035 静岡県静岡市宮竹 1-13-18 TEL.054-238-3190
中京支店　〒468-0011 愛知県名古屋市天白区平針 1-2105 TEL.052-807-5520
関西支店　〒560-0054 大阪府豊中市桜の町 6-9-27 TEL.06-6844-9233
中国支店　〒731-3167 広島県広島市安佐南区大塚西 3-3-51 TEL.082-849-5661
九州支店　〒818-0134 福岡県太宰府市大字大佐野 481-3 TEL.092-925-3230

＊本誌掲載内容および写真・図版の無断転載はかたくお断りします。

故宮の正面入り口、午門の東側には故宮を模したデザイントイレも登場

STREET FURNITURE

世界のストリートファニチャー……6

［中国：北京］

文／原口純子
写真／編集部

China

旧鼓楼大街の伝統建築風公衆トイレ。2008 年北京オリンピックに向け、北京では「行きたいと思ったら 8 分」で公衆トイレが見つかる街を目指すという

伝統建築を模したデザイントイレ

すさまじいスピードで発展中の印象がある北京だが、元代（13～14世紀）に基礎が築かれた旧市街には、下水道の不備により自宅にトイレのない家も少なくない。胡同（フートン）と呼ばれる古い横丁が走る旧市街エリアを歩けば、公衆トイレが頻繁に目につき、その数は約7700カ所、世界一の数、といわれている。

数だけはやたらに多いのだが、衛生条件が悪いのが北京の長年の泣きどころ。俗に「ニーハオトイレ」と呼ばれるドアも仕切りもないトイレがまだあり、2008年北京オリンピックを前に、メンツをかけての改革が進んでいる。2004年には北京で第4回世界トイレサミットが開かれ、その直後に北京市は、トイレの改造に5000万元（約7億円）を投じるプランを発表。トイレのデザインコンテストも開催され、入賞作品のなかからは古都を意識して伝統建築を模したトイレなどが具現化されている。オリンピックまであと1年余り、世界をあっといわせる最先端デザイントイレが、これからまだまだ出現するかもしれない。

TOEX
暮らしをつつむエクステリア
トエックス

大切にしたのは使い手の声

卵形ビームの

サポートレール UD

屋外用手すりは今、本当に使いやすいものとなっているでしょうか？TOEXではさまざまな利用者の声を聞き、試作品の使い勝手を試していただきました。そしてたどり着いた答えが、“卵形ビーム”。人に優しい7つの特徴をもつ、ユニバーサルデザイン手すりの新スタンダードをお確かめください。

設計者のためのビジネスサイト「ネルシスネット」［www.nelsis.jp］
東洋エクステリア株式会社

本カタログには環境に配慮するため、下記の素材を使用しています。
●用　　紙／古紙配合率100%再生紙
●印刷インキ／揮発性有機化合物（VOC）ゼロの植物性インキ
R100 PRINTED WITH SOY INK

カタログコード ER05
06100045 FON-TP